

地域の魅力発信に よる絆結び

—高橋九郎の活躍を後世につなげる—

平成27年度
学生による地域活性化プログラム

高橋治道ゼミナール活動報告書



ご あ い さ つ



経済経営学部長 村山 光博

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」は、平成 19 年度に文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラムに採択された「学生による地域活性化提案プログラム 一政策対応型専門人材の育成」に始まり、今年度で丸 9 年となります。次年度はいよいよ 10 年目ということになるわけですが、この教育プログラムの成果が実際に地域活性化に貢献できているのかについて、これまでを振り返りながら今後の取り組みへの方向性を確認する時期に来ているとも言えます。

直接的に目に見える貢献とまでは行きませんが、始めたばかりの 9 年前と比較すると周辺地域における「学生による地域活性化プログラム」の認知度は明らかに高まっていると感じます。これまで本プログラムの運営において積極的にご支援をいただいていた地域連携アドバイザーの皆様だけでなく、初めてお会いする地域の方々からも本プログラムの個々の取り組みテーマに対するお問い合わせや称賛の声などをいただくことが増えてきております。また、テーマによっては学生の取り組みに関して新聞やテレビなどのメディアでも大きく取り上げていただくことが多くなりました。

長岡大学の建学の精神は、

- ・ 幅広い職業人としての人づくりと実学実践教育の推進
- ・ 地域社会に貢献し得る人材の育成

です。「学生による地域活性化プログラム」は、まさにこの精神を実現するための本学の重要な教育プログラムであると言えます。

「地域活性化とは何か」という問いに対する明確な答えは無いと思いますが、そのような答えの無い課題に対して、どのように考え、どのように行動して行くのかを学生が自ら試行錯誤しながら体得していくことができます。これは大学を卒業して地域社会の一員となる学生たちが、将来、それぞれの地域が抱える課題を乗り越えていかなければならないことを考えると、彼らにとって貴重な体験となるに違いありません。

本プログラムでは、ゼミナールという単位で 1 つのテーマを取り上げ、ゼミに所属する複数名の学生がグループで活動を進めて行くことになりますが、時には学生同士での意見の食い違いや、ちょっとしたすれ違いなどが起こることもあります。このような体験も学生がさらに一段成長する要素となります。ゼミで決めた研究テーマをまとめ上げるために、どのように他の学生とかかわりながら取り組みを進めて行くべきなのか、この取り組みの中で自分の果たすべき役割は何であるのか、などを考えながら活動を行っていくことで、チームで活動することの難しさだけでなく、チームでやり遂げたことの充実感や達成感を味わうことができます。

「学生による地域活性化プログラム」では、学生が地域の皆様と一緒に考え、汗をかき、そして楽しむことで、当面の地域貢献だけでなく将来にわたって地域の活性化を担っていける人材の育成を目指しております。

地域の皆様には日頃より、本プログラムへの多大なるご支援とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月

はじめに

地域の魅力発信による絆結び ～神谷の魅力を広げ・つなげる～



長岡大学教授／ゼミ担当教員 高橋 治道

高橋ゼミは、長岡大学の「学生による地域活性化提案プログラム（現在の“学生による地域活性化プログラム”）」が平成 19 年文部・科学省の“現代的教育ニーズ取組支援プログラムに採択されて以来、プログラムに参加しています。

平成 20 年度は、長岡市が平成 18 年に策定した「長岡市総合計画前期基本計画」にある「安全・安心」に関する基本施策の具体化に取り組みました。その取り組みの中で、安全・安心に関する若者への意識調査を行ったところ、“「豊かで安全で安心して暮らせる地域づくり」の基本は「地域コミュニティづくり」ではないか”とのコメントが書かれていました。

そこで、平成 21 年以降現在に至るまで「地域コミュニティを中心とした豊かで安全・安心な暮らし」を中心テーマにして、長岡市神谷地区で活動を行っています。神谷地区は、旧三島郡来迎寺村一帯の大地主である高橋家と旧来迎寺村役場が所在した場所だったことから、歴史的遺産や建造物が豊富にあり、かつ地域コミュニティの機能がしっかりしていて地域全体の一体感が強く、そのうえ行政に頼るのではなく自分たちの手で地域づくりを行うことを積極的に推進している地区です。

神谷地区での最初の取り組みは、地域活性化の要因を明らかにする活動を行いました。神谷地区の主だった人や諸団体への聞き取り調査を行い、地域活性化の五つの要因を明らかにできました。

平成 22 年度は、神谷地区からの要請で、地域に現存する歴史的建造物“旧神谷信用組合の建物”と“耕作されず放置されている畑”の活用方法を考える取り組みを行い、“旧神谷信用組合の建物を拠点とした畑の貸し出しシステム”の提案をしました。この活動を行う中で神谷地区在住の水島義郎氏が、明治 37 年に新潟県で初めてチューリップを自宅の庭に咲かせたという史実を知りました。

平成 23、24 年度は、神谷の子ども達や若者、他地域から移住して人達に地域の歴史などを伝えることを目的として、神谷地域の歴史的建造物や史実などを紹介する“神谷情報マップ”を作りました。また、“新潟県チューリップ初開花の地”を知らせる看板設置やチューリップの植栽活動を行いました。

平成 25、26 年度は、神谷地区の子供たちに、地域の自然を体験することを通して地域の自然の素晴らしさを再認識してほしいということと、神谷の中を流れる“須川”が昔は生活と切り離さことのできない存在であったことを伝えることを目的として、“須川”を E ボートで下るイベントを企画しました。このイベントには、7歳から80歳までの延べ30人の神谷の住民の方が参加されました。この“須川下り”の様子は NHK のクローズアップ現代の中で全国放送されました。

今年度は、“最近巴が丘にあるもみじ園が脚光を浴びているが、その基を作った高橋九郎のことが全く知られていないのは、寂しいことである。”という神谷の人達の声を聞いたことから、高橋九郎の人物像と功績を紹介する“高橋九郎マップ”作りに取り組みました。

神谷での活動を通して先輩たちがこれまでに得た資産、図書館やインターネットを使った資料収集を通して、高橋九郎の実像を描いたマップを作ることができました。このマップを使って、神谷の子ども達やもみじ園を訪れる人たちに地元振興に尽力した高橋九郎のことが伝わることを願っております。

資料収集が中心となり、神谷の人達との交流を積極的に行うことができませんでしたが、春に参加した「どろんこ田田植え」の行事を通して、神谷地域の素晴らしさを体験できたと言っております。

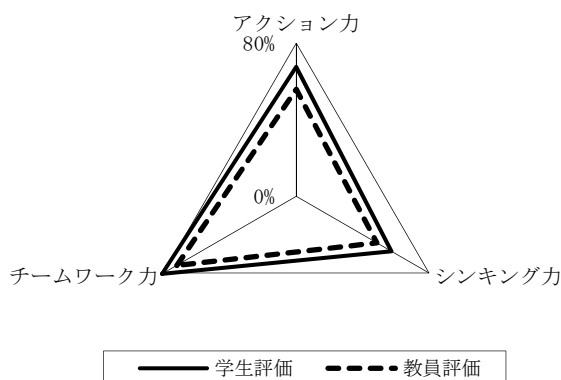
学生たちの活動を温かい目で見守ってくださっている神谷の人達にお礼申し上げるとともに、今後ともご指導ご鞭撻くださるようお願い申し上げます。

平成 28 年 3 月

平成 27 年度 学生による地域活性化プログラム 社会人基礎力の上昇度

地域活性化プログラムにおける学生教育の目標は、社会人基礎力の向上、ビジネス展開能力の向上、専門的スキルの向上が目的である。平成 27 年度学生による地域活性化プログラムに参加した 9 取組の学生の「社会人基礎力」の伸び具合について、学生とゼミ担当教員にアンケートを実施した。アンケートは取組に参加した学生一人一人を対象に、社会人基礎力の変化を評価する形で実施した。学生は自己評価（有効回収 68）であり、教員は各ゼミ生についての評価である。

＜社会人基礎力＞の上昇度



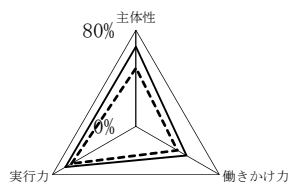
★「社会人基礎力」

＝「アクション力」「シンキング力」「チームワーク力」が上昇

3つの社会人基礎力の上昇度（取組前と取組後の比較）は、学生の自己評価と教員評価の間にずれがある。今後の取組においては、今年度の結果に現れている学生評価と教員評価の差を小さくすると同時に全体的な上昇度を高めていくことに対して、継続的に検討していく必要がある。

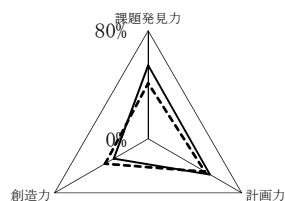
	学生評価	教員評価
アクション力	67.6%	55.9%
シンキング力	57.4%	48.5%
チームワーク力	80.9%	72.1%

＜アクション力＞の評価



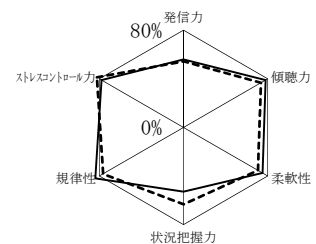
	学生評価	教員評価
主体性	66.2%	48.5%
働きかけ力	48.5%	39.7%
実行力	67.6%	61.8%

＜シンキング力＞の評価



	学生評価	教員評価
課題発見力	54.4%	41.2%
計画力	52.9%	48.5%
創造力	29.4%	36.8%

＜チームワーク力＞の評価



	学生評価	教員評価
発信力	55.9%	54.4%
傾聴力	77.9%	73.5%
柔軟性	75.0%	70.6%
状況把握力	52.9%	63.2%
規律性	83.8%	76.5%
ストレスコントロール力	77.9%	82.4%

＜アクション力＞

アクション力の3つの指標を比較すると、主体的には取り組めたと思っている学生の割合は高いが、教員の評価は低くなっている。

学生はそれなりに積極的に活動を行っていると感じている一方で、教員としては、まだまだ自主性が足りないと感じているようである。

＜シンキング力＞

学生の自己評価では、課題は見つけられたが、自分で計画して課題に立ち向かい、課題解決ができた学生は少なく、また創造力が極端に低くなっている。また、教員評価でも創造力については厳しいものになっている。昨年同様、シンキング力が弱い傾向があり、この点をどのようにして伸ばしていくかが課題として残った形である。

＜チームワーク力＞

チームワーク力は、「アクション力」や「シンキング力」よりも学生評価と教員評価の類似性が高い。

学生の自己評価も同様であるが、教員の評価が発信力と状況把握力が低い点は、今後指導を強めていく必要がある。



平成27年度 学生による地域活性化プログラム 地域の魅力発信による絆結び ～高橋九郎の活躍を後世に伝える～

■担当教員
高橋治道

■ゼミ学生
4年生：八藤後諒、今井大介、岡田孝
3年生：板谷千紀、今井練、高野奏翔、山田大智
■アドバイザー：白井湛氏(神谷区長)
桑原眞二氏(ながおか生活情報交流ねっと理事長)

取り組みの目的

長岡市神谷地域での6年間の活動を通して、明治時代後半に生きた地主の高橋九郎が現在の神谷やもみじ園の基礎を作ったことを知った。しかし、亡くなってから94年が過ぎ、神谷や地域の人たちの間からその史実が忘れ去られようとしている。そこで、地域のために尽くした高橋九郎の功績を神谷の人達やもみじ園を訪れた人たちに知らせ、後世に伝え残すことを目的として“高橋九郎マップ”を作成する。

取り組みの意義

高橋九郎マップを作り、地域の人達に広めることで、神谷の歴史や高橋九郎が地域発展のために尽くした業績を神谷地域に住む人たちが共有できる。地域の伝統と誇りを知り、守ってゆくことは、地域に活力をもたらし、地域活性化につながるものである。活動に取り組む学生にとっては、取り組みの企画・実行、地域住民との交流を通して、社会人基礎力を高めることができる。

取り組みの成果

活動を通して、高橋九郎の人物像や業績をまとめた高橋九郎マップを作成することができた。作成したマップは、神谷地域の住民や高橋九郎が開いたもみじ園を訪れる人たちに等に配布することを計画している。



活動の枠組みと方法

- ゼミメンバーの数が少なかったことから、3・4年のゼミ生が一緒になって取り組んだ。
- 資料調査の分野を”農業、経済人、政治家、地主”の4分野に分け、各自が担当分野の資料収集とマップの原稿作りを行った。
- 編集は、4年生が中心となって行った。

活動の概要

- 長岡中央図書館やインターネットの利用と共に、産業史を専門とする松本先生の協力を得ながらの資料収集を中心とした活動を行った。
- 資料収集に時間がとられ、神谷の人達との交流は、5月に行われた「どろんこ田田植」とその後の慰労会への参加だけになってしまった。

地域の魅力発信による絆結び
～高橋九郎の活躍を後世に伝える～

高橋治道ゼミナール

4年	1 2 E 0 3 3	八藤後 諒		
	1 2 M 0 0 1	今井 大介	1 2 M 0 0 5	岡田 孝
3年	1 3 E 0 0 4	板谷 千紀	1 3 E 0 0 5	今井 練
	1 3 M 0 1 9	高野 奏翔	1 3 M 0 3 5	山田 大智

目 次

1. はじめに	1
1.1 取り組みの趣旨	1
1.2 取り組みの目的	1
1.3 取り組みの概要	1
2. 神谷地区の概要	2
3. 神谷地区との交流	3
4. 高橋九郎について	4
4.1 高橋九郎の略歴	4
4.2 地主としての活躍	7
4.3 企業家としての活躍	10
4.4 政治家としての活躍	19
5. 高橋九郎マップの作成	21
5.1 マップの作成の意義	21
5.2 マップのコンセプト	21
5.3 マップの作成	23
6. マップの活用方法について	31
7. まとめ	32
7.1 神谷地区との交流について	32
7.2 高橋九郎のマップの作成について	32
7.3 マップ作成を通しての提案	33
7.4 活動の反省点と改善点について	33

参考文献

謝辞

1. はじめに

1. 1 取り組みの趣旨

近年、少子高齢化や核家族化、若者の田舎離れなどの影響で、農山村地域が活力を失いつつある。そのような中で、自分たちの生まれ育った地域の歴史や文化を守るとともに次の世代に伝えるために、住民自らが立ち上がり地域の活性化に取り組んでいる地域が増えてきている。

地域の文化・歴史・自然・建築物などの資産を守り、次の世代へとつなげていくことは、その地域の魅力と伝統を後世に伝え残してゆくことにほかならず、先人たちの知恵と誇りを伝え残してゆくことを意味する。これらの伝承活動は、地域の魅力の再認識だけでなく、新たな魅力の発見につながり、地域に活気をもたらすとともに郷土愛を育み、さらなる活性化につながる。

以上の視点に立ち、我々「高橋ゼミナール」は、地域の資産を生かした住民による地域活性化のための取り組みを平成 21 年度から「地域活性化プロジェクト」の活動の中で行っている。具体的には、県や市などの地方自治体や国の手助けを待つのではなく、「自分たちの地域は自分たちで守っていく」という思いを一つにして地域活性化に取り組んでいる長岡市神谷地区（旧越路町神谷地区）において、地域に残された文化・歴史・自然・建築物などの資産を守るとともに後世に伝えながら地域の活性化を図る方策について様々な角度から取り組んできている。

1. 2 活動の目的

高橋でゼミでは、これまでの 6 年間を通して、神谷を紹介する“神谷マップ”の作成、新潟県のチューリップの発祥地が神谷であることを広げる“看板作製やチューリップの植栽”活動、以前は神谷の中を流れる須川と神谷の人達の生活が密着し、水遊び、洗濯や野菜洗い、荷物運搬の手段として使われていたことを思い出してもらうとともに須川と親しむことを目指した“E ボートによる須川下り”などの取り組みを行ってきた。

これら 6 年間の活動を通して、明治時代の地主であった高橋九郎という人が神谷にとってかかせない人物であることを知った。高橋九郎は、1850 年に長岡藩西組宮川外新田村（現長岡市神谷）の庄屋高橋九郎右衛門の長男として生まれたのち、1880 年に家督を継ぎ、宮川外新田や道半村をはじめとする近隣地域の地主として活躍するだけでなく、政治家（衆議院議員等）や企業家（銀行開設）としても幅広く活躍し、地域の発展に尽くした人である。

しかし、高橋九郎が亡くなってから早 94 年が経ち、高橋九郎のことを知る人はもちろんのこと、語れる人もほとんどいなくなり、神谷の人たちの間からも忘れ去られようとしている。

そこで今年度は、高橋九郎が地域の発展のために果たした功績を神谷の人達に知らせるとともに、後世に伝え残すことを目的として“高橋九郎マップ”を作成することにした。

1. 3 取り組みの概要

ゼミのメンバー数が少ないことから、4 年生 3 人と 3 年生 4 人の 7 名が合同で活動した。

まず今年度の活動について話し合った。高橋九郎は神谷にとっては欠かせない人であり、氏をより多くの人に知ってもらうことは神谷の活性化につながると考え、高橋九郎の人物像や生い立ち、業績などを紹介する“高橋九郎マップ”を作ることにした。

氏の業績を調べるために、各自が担当する分野を決めた。調べる分野は、農業について、経済人として、政治家として、そして神谷地区と高橋九郎の 4 分野とした。資料調査は、図書館やイ

インターネットを使って行ったが、特に長岡市中央図書館には高橋九郎に関する資料が多くあり、大変参考になった。

集めた資料を基に、8月から12月までの4カ月をかけてマップを作成した。マップは親しみやすいものにするために、地図の部分は手書きとした。又、業績が容易に分かるように農業、経済、政治の3分野に分けて功績を紹介することにした。ゆかりの地を実際に訪れてみたい人のために、神谷をはじめとするゆかりの地の紹介では、容易にその場所にたどり着けるように地図を工夫した。さらに氏の年表を作成し、氏の生涯を概観できるようにした。

2. 神谷地区の概要

長岡市神谷地区は、信濃川と洩海川に挟まれた長岡市南部（旧越路町の東部）の平野部に位置し、周りを田んぼに取り囲まれた現代日本の平均的な農村地域である。地区には、戦後の農地解放が行われるまでこの付近一帯の土地を所有した大地主高橋家が在住し、昭和30年3月に来迎寺・岩塚村・塚山村・石津村が合併して越路町が誕生するまでの間、旧来迎寺村の村役場が所在した地でもある。また、明治37年に設立された神谷信用組合、大正5年設立の神谷銀行（後に北越銀行の前身である六十九銀行へ合併）が所在したところでもある。また、1850年に高橋家の長男として生まれた高橋九郎（明治44年に帝国議会の衆議院議員）が中心となって、地区の産業活性化に古くから取り組んできており、新潟県の県花であるチューリップが県内で初めて開花した地でもある。

現在も米作を中心とする農業地域ではあるが、サラリーマンとして働いている農家が大半を占めている。現在の戸数は約160戸、住民数は約630人である。その約25%は、ここ20数年の間に2度にわたって行われた宅地造式によって他の地区から移り住んできた人たちで構成されている。そのため、都市化が進む大中都市周辺の農村地域同様に、古くからの住人と新興住宅地の住民との間の協調を課題として抱えている地域である。

図表2-1 長岡市神谷地区



(<https://www.google.co.jp/maps/>より引用)

3. 神谷地区との交流

どろんこ田植え

神谷で毎年 5 月に開催されている「どろんこ田植え」に参加した。当日は、神谷の小学生からご年配まで幅広い層の方々が参加された。

現在では機械化が進み、昔のような手で植えることはなくなったが、どろんこ田の田植えでは、昔ながらの田植えを子供たちに伝えようということから手で植えた。手で植える時に欠かせないのがゴロと呼ばれる昔ながらの道具である。ゴロは六角形の形をしており、田んぼの中を転がして十字の印をつけていく道具で、手で植える時代の田植えには欠かせない道具であった。

ゴロ押しが終わると小学生たちは早々と田んぼの中に入っていったが、私たちは気温の寒さと田んぼの冷たさからなかなか田んぼに入ることができなかった。しかしいざ泥の中に入ってみると、最初は冷たく感じたが、次第に暖かく感じられた。泥の中では身動きがしづらく、体を思うように動かすことができなかった。なんとか移動したが、間違えてもゴロで付けた目印を消さないように慎重に移動した。植える苗の量には適量があり、育ちやすい量を苗の塊から抜き取り、それをゴロで付けた目印の間に植えていった。四苦八苦しながらの田植えであったが、神谷の方々と連携をとることできれいに植えることができた。作業は、約 2 時間で終了した。機械化が進んだ現代では、手で植えるということはあまり経験できないことであり、貴重な経験となった。

田植え終了後に開かれたごくろうさん会では、去年の活動の話や好きなお酒の話などをし、神谷の人達との交流を深めた。この活動を通して、神谷の人達はイベントなどを積極的に行うことで絆を大切にしていると感じた。

図表 3－1 田植えの様子



4. 高橋九郎について

高橋九郎の活躍を4つに分けて紹介をしていく。4. 1 神谷地区と高橋九郎では、高橋九郎が生まれてから亡くなるまでの生涯について年を追ってまとめた。さらに高橋九郎が神谷でどのようなことを少年時代に学んだかまとめた。4. 2 では、地主としての活躍や農業技術者として神谷の農業を大きく変えた出来事等についてまとめている。4. 3 では、企業家としての活躍をまとめた。神谷信用組合や両毛鉄道のプロジェクトに参加したことなどを記載した。4. 4 では、政治家としての活躍についてまとめた。ここでは高橋九郎が衆議院に選ばれたことや来迎寺村村長を務めていた等、政治家としての高橋九郎について記述している。

4. 1 高橋九郎の略歴

図表4-1 高橋九郎

1850年(嘉永3年)に高橋家9代目初の長子として生まれた。幼名は繁太郎、後に右八郎と名乗った、父亡き後は10代目の家督を相続し、父名の九郎を継いだ。

1864年(元治元年)から1869年(明治2年)まで小千谷市片貝町私塾「耕読堂」で丸山貝陵より漢学を学んだ。その後、1870年(明治3年)から1873年(明治7年)までは、浦の私塾「慈光覺」で旧長岡藩校崇徳館都講木村鈍叟より漢学を学ぶと同時に優れた数理能力をみがいた。両塾での学びの中で石黒忠恵や井上円了などと出会い、自らの飛躍のための人的基盤を得た。

1894年(明治27年)3月に行われた帝国議会の第三回衆議院選挙にて当選し、当時の来迎寺村における初の帝国議會議員となった。旧越路町域出身の國會議員は、後に大地主互選の貴族院議員に当選した塚山出身の長谷川赳夫氏の2人だけである。後に東京に出て活躍する長谷川氏に対して、高橋九郎は議員時代もその関心を地元地域へ向けていた。

地域の名望家として、1878年(明治11年)に十六大区小六区受け持ちの副大区長に就任した。その後1881年(明治14年)には、宮川外新田・道半両村の戸長に選出(公選)された。1884年(明治17年)からは、宮川外新田はじめ10か村連合の戸長に推された。若くして既に地域住民から敬慕を集めていた。

1908年(明治41年)には、宮川外新田・道半地区の土地改良を推進した。信濃川と渋海川に挟まれた農村集落における最大の課題は、洪水対策であった。農民の協力を得ながら水路の付け替えなどを行い、耕地整理を施工した。また、県外から技術者を招き、暗渠排水を施工し、成功させた。これにより農民の苦労は軽減するとともに収量の増大に結びつき、大変喜ばれた。このころ、高橋九郎は農家に果樹園芸等の副業を奨励し、チューリップを県内で最初に導入した。

高橋九郎氏が地域住民より信頼と敬慕を得て、地域自治に参画していく契機となったとされているのが、家督相続後間もなく参画した地租改正事業に尽力したことにある。これは各地域において長い年月と費用を要した大事業であり、当時20歳代であった高橋九郎はその優れた測量技術と熱心な公共精神が認められ、これに関わる測量業務の遂行者に選ばれた。

1904年54歳の時、不慮の自然災害に対する復旧や耕地開発・改良、副業の導入等の生活基盤



初代
高橋九郎
(明治37年～大正9年)

向上のために、県下初の信用組合となる神谷信用組合を設立し、経営に当たった。組合員には自発性を促し、督励して好業績を上げ、1910 年（明治 43 年）には大日本産業組合新潟支部より表彰されている。

1916 年（大正 5 年）に地域振興にかかわる多大の貢献により藍綬褒賞を受賞している。この年 66 歳で病のために退隠した。1920 年（大正 9 年）70 歳で神谷信用組合の組合長を辞任したのを最後に一切の公務から身を引いた。

幼児に学んだ「修身・齐家・治国・平天下」を一生の信念とし、1922 年（大正 11 年）9 月 72 歳で逝去するまで、目線を地域振興に置いて篤農家・起業家・地方政治家とし明治を生き抜き、その生涯を地元地域の発展にささげた。

これらを年表にして図表 4－2 に示した。

図表 4－2 高橋九郎の年表

高橋九郎年表

- 1850 年（嘉永 3 年）12 月 27 日 長岡藩西組宮川（現長岡市神谷）の庄屋高橋九郎右衛門の長子として誕生。
 - 1852 年（嘉永 5 年） 南魚沼郡敷神村大字後山（現在の南魚沼市野江乙）で 1100 年以上の伝統を誇り、母・祖母の実家の親戚にあたる佐藤家へ後継養子に入る。
 - 1864 年（元治元年） 高橋家に男子が誕生しなかったために生家に戻る。
隣村片貝の「講読堂－丸山貝陵塾－」（現小千谷市片貝町浄照寺境内）に入門。石黒忠恵（後の軍医総監、日本赤十字社長、枢密顧問、正二位子爵）との交流始まる。
 - 1870 年（明治 3 年） 浦私塾「慈光塾」において木村純斐（本名を誠一郎、旧長岡藩校崇徳館都講）に就いて漢学を深める（1871 年まで）。
 - 1873 年（明治 6 年）8 月 14 日 公立の外新田校（小学校）が宮川外新田に開校。明治 42 年には基本金を設立し、利子をもって学校の経費に充当し、学区民からは教育費を徴収せず。
 - 1878 年（明治 11 年） 第十六大区小六区戸長に就任。
 - 1880 年（明治 13 年） 父高橋九郎右衛門の死去により家督を継承。
 - 1881 年（明治 14 年）12 月 宮川外新田・道半両村の戸長に選出（公選）。
 - 1882 年（明治 15 年） 時の鐘を自宅土蔵の上に設置し、毎日午前 11 時と夜 12 時に時を知らせた。
神谷では、現在も午前 11 時になると火の見櫓のサイレンが時を知らせる。
 - 1882 年（明治 15 年） 時の鐘を自宅土蔵の上に設置し、毎日午前 11 時と夜 12 時に時を知らせた。
神谷では、現在も午前 11 時になると火の見櫓のサイレンが時を知らせる。
 - 1884 年（明治 17 年）8 月 宮川外新田はじめ 10 か村連合の戸長となる。
 - 1888 年（明治 21 年） 村会議員に就任（晩年に至るまで）。
 - 1891 年（明治 24 年） 村内救民に救助米を施興。
 - 1894 年（明治 27 年）3 月 帝国議会の衆議院議員となり、第六回帝国議会に出席。
 - 1896 年（明治 29 年） 神谷信用組合を設立。
 - 1896 年（明治 29 年） 巴ヶ丘別邸（現もみじ園）を建築。
 - 1898 年（明治 31 年）8 月 帝国議会の衆議院議員に再任。一三回、十四回、十五回、十六回の帝国議会に出席。
 - 1903 年（明治 36 年） 蘭草苗を岡山より移入し、栽培を奨励。畳表工場を作り普及に力を注ぐ。
 - 1904 年（明治 37 年） チューリップ球根を入手し、譲り受けた同村水島義郎氏が県内で初めて開花に成功。
 - 1906 年（明治 39 年） 私設气象台を開設し、気象旗掲揚による天気予報の告知開始。以後 40 年間、ラジオが普及するまでの 40 年間続けられた。
 - 1907 年（明治 40 年） 土地改良の目的で暗渠排水を施設。
 - 1908 年（明治 41 年） 宮川外新田・道半地区の土地改良を推進。
 - 1908 年（明治 41 年） 共同苗代一町歩を設置。
 - 1908 年（明治 41 年）2 月 来迎寺村村長に就任（明治 45 年 3 月まで）。
 - 1904 年（明治 37 年） 神谷信用組合を設立。初代組合長となる。
 - 1911 年（明治 44 年）9 月 9 日 ウェップ夫婦による神谷信用合などの調査。巴ヶ丘別邸（現もみじ園）に 1 泊。
 - 1911 年（明治 44 年） 小作米品評会開催。100 年以上の小作継続者を表彰。
 - 1914 年（大正 3 年）8 月 信濃川大洪水。神谷信用組合は水害救済のために式萬円の貸出を行う。
 - 1916 年（大正 5 年）10 月 25 日 神谷銀行を設立（1934 年 4 月第六九銀行と合併）。
 - 1916 年（大正 5 年） 勅定藍綬褒章を賜る。
 - 1922 年（大正 11 年）9 月 21 日 永眠 享年七十三歳。
- その他
- 銀行経営に関与：第六九銀行、与板銀行、関原銀行、新潟県農工銀行の経営に関与。
 - 鉄道事業への関わり：北越鉄道（現 JR 信越本線）の現ルートを推進、両毛鉄道の第 2 位の大株主、毛越鉄道の計画に関係。
 - 日本石油会社（現 JR 日鉱日石エネルギー）の設立：殖産協会に参画、設立発起人に名を連ねる。
 - 銀山殖産株式会社の設立：取締役、北魚沼郡湯之谷村下枝折字赤川の大規模開発を計画。
 - 長岡病院（現長岡赤十字病院）の設立：病院設立に際し、石黒忠恵に相談。創設時の医師の大方を石黒氏が斡旋。
 - ソメイヨシノ桜：巴ヶ丘に移植し、新潟県で育つことが確認できた後、悠久山に植えられた。
 - 言い伝え：神谷中央公園（旧果樹園跡）内に現存するプラタナスの大樹は、高橋九郎さんが移植したものだと言われている。高橋家と神谷小学校との境界の石垣にもかなりの数のプラタナスの大木が植わっていた。

4. 2 地主としての活躍

4. 2. 1 地主として

農業技術者として高橋九郎は、私財を惜しみなく農業技術の向上と地域住民の暮らしを豊かにする為に使い、1904年（明治37年）には神谷信用組合を創設して勤儉貯蓄を奨励するとともに産業に必要な資金の融通を図った。また詳しくは後述するが、“時鐘”を設置して田畑で働いている人に時報を知らせたり、“私設气象台”を設けて天気予報を行って農家の便に資するなど、率先して地域振興に努めた。

神谷地区は、稲作で生計を立てている農業従業者がほとんどであった。しかし、米作り一本槍の農業は天候による稲の出来、不出来の差が大きく、さらに災害時には大きな被害をもたらした。これに対処するための対策として、高橋九郎は養蚕や蘭草栽培などの副業を推奨した。

篤農家、企業家、政治家として幅広く活躍したが、そのうちの1つが地主としての活動である。来迎寺村一帯の地主として、小作人への協調的対応を重要視し、作人に対して協調を持って接する“家族的親愛”を大事にしていた。そのため、小作人が高橋家に来れば必ず飲食をして帰るのが習わしであった。また、百年以上にわたって一つの欠点もなく忠実に小作を務め、家庭も円満で、社会的にも忠実な小作人16人に対して『一百年忠実記念』として銀杯を贈り表彰した。この小作人表彰について、新潟新聞はこれを新潟県下最初の試みとして報道している。

4. 2. 2 模範村の為に耕地整理と暗渠排水の施工

昔から神谷地区の田んぼの区画は乱雑で、用排水や農道の不備による稲作上の支障が多かった。また渋海川の堤外浸出が常にはなはだしい状態であった。地域振興を心にかけていた高橋九郎は、1907年（明治40年）に私財を投じて暗渠排水を設置したが、県下に暗渠排水施工の技術者がおらず、熊本県より技師を招いて施工した。1908年（明治41年）からは、宮川の西萱野、村下、道半の須川島、雁島および突切島の合計42町歩に中沢の本途、来迎寺の午ノ新田、浦の番城塚を加えた約100町歩について、当時本県では珍しかった耕地整理を行った。

その他にも、須川の川筋変更と新須川掘削を行った。これは須川が突切島の前を通って渋海川に注いでいたが、渋海川の川底が年々あがり排水不良になった為に浦、道半、宮川外新田および中沢関係各村において、1886年（明治18年）から19年かけて川筋を変更して中沢の裏を通し、それにより先の下流で渋海川へ注ぐようにした。

須川の川筋を変更した後も渋海川の川底が上がるにつれて排水が漸次不良となってきたので、宮川の北端より新須川を掘削して分水し、飯島地内で直接信濃川へ吐かすことになった。県営の事業として大正6年に起工し、同11年に完成した。

4. 2. 3 共同苗代と果樹園、豊表や花苅などによる副業の推奨

1908年（明治41年）に県内最初の共同苗代を設け、入選種、薄播を奨めて健苗の育成を図った。また誘蛾灯の設置、馬耕、正条植を奨励するなど、農業技術者として農事の改良を行った。さらに永年に亘り、優良納米の小作者を表彰して産米の品質向上に努め、競わせることで農業全体の質を高めた。

農事の改良は稲作だけにとどまらず、屋敷内の雑木を伐採して果樹の栽植を始めた。単作地帯における農家の収入が少ないことや天候や災害で収入が得られないことも多くあったことから副

業を考え、明治 36 年自費により製荳工場を建て、岡山県から技術者(山崎)を招いて畳表や花荳の製織法を人々に教えた。

4. 2. 4 時の鐘と天気予報

昔は一般の農家には時計がなく、時刻を知らせることができなかったため農事に不便であった。1882 年（明治 15 年）、高橋九郎は自宅の屋上に時刻塔を設け、釣鐘を鳴らすことによって田に働く人々に時間を知らせていた。鐘は、昼の準備を知らせるために午前 11 時に 1 回、亭主の帰宅を促すために午前零時に 1 回鳴らしていた。これは釣鐘が廃止されるまでの 53 年間継続され続けた。この風習は、午前 11 時にサイレンを鳴らすという形で現在も神谷に引き継がれ、地元住民にとっては馴染み深いものとなっている。

高橋九郎は、1906 年（明治 39 年）に私設气象台を設置した。これは農業にとって気象情報が必要であると考えてのものであり、自記晴雨計と自記温度計を自費で購入し、自宅前に百葉箱を設けた。また新潟測候所へ毎日（冬季を除く）連絡をして得た天気予報を宅前の果樹園内に設けた予告塔に信号旗として掲げ、地域住民にその日の天気を知らせた。農家はもちろんのこと、付近の小学校はこの予報を頼りに屋外諸行事を行ったといわれている。この天気予報は、太平洋戦争中までの約 40 年間継続した。

4. 2. 5 農業技術者としての高橋九郎

神谷地区は県下に有名な模範村となって広くその名が知られるとともに、視察の人々が度々訪れるようになった。しかし、その都度高橋家において農事の談話を聞いたため、同家では特に視察者用の大テーブル 10 基と椅子 100 脚を新調したほどの盛況であった。

高橋九郎は多年に亘り農業技術者や地主として神谷地区、さらには長岡市内に郷土農村の振興に努め、幾多の公共事業に尽くしたことにより、大正 5 年 3 月 22 日勅定の藍綬褒章を授けられ、その功績を表彰された。

4. 2. 6 ウェップ夫妻と高橋九郎の交流

1911 年（明治 44 年）シドニー（1859－1947）とビアトリス（1858－1943）のウェップ夫妻は、世界調査旅行の途中、社会政策の調査のため来日し、長岡地域でも調査を行った。高橋九郎は、温情的地主経営と神谷信用組合の設立の理念について説明した。シドニーウェップ博士から新潟県の地主小作関係について説明を求められた高橋九郎は、“地主小作の関係には、地主と小作が直接接することなく、仲小作という支配人をおく「都市的又ハ華族的組織」と、土地の貸し付けと小作料の納入を、地主と小作人が直接に取り交わす「農村的組織」の二種類があり、「普通ノ取扱ヒ方」である后者が新潟県の大部分である。その「農村的組織」にも、「親愛的貸地」と「契約的貸地」の二種類があり高橋家では「親愛的」に小作人と接してきたので、二百年来、小作人に移動がない。”と説明した。小作人に対して「家族的親愛」＝調和をもって接していた高橋九郎は、「近來世運ノ發達ト共ニ迫々人情浮薄ニ流レ…計算…理屈的ニ小作ニ接スル者」が現れてきたことは「深く戒ムベキコト」だとも述べた。

4. 2. 7 ウェップ夫妻と神谷信用組合

神谷信用組合についてシドニーは、「高橋氏の地所では、この種の友愛組合、または、別の同じような地方組合の支部があった。加えて、これは、小農耕作者である組合員が種子、及び他の必需品、を卸売原価で購入する協同組合の始まりであると思えた。こうした友愛組合、貸付組合、及び慈善組合の組み合わせは、この間の日本の特徴であったと思われる。」と理解し、「この種の友愛組合、または、別の同じような地方組合の支部」を「種子、及び他の必需品、を卸売原価で購入する協同組合の始まり」と評価している。信用組合とそこで行われている事柄をまとめると、「友愛組合、貸付組合、協同組合、及び、慈善組合の組み合わせ」であって、「この間の日本の特徴」であると評価した。神谷信用組合は当時の日本の信用組合運動の模範組合として何度も表彰されているように、日本において先進的な組合であった。また、神谷信用組合と他の組合との「組み合わせ」は、「必需品、を卸売原価で購入する協同組合の始まり」として、日本における、イギリス協同組合運動の源流であるロッチデールパイオニアーズ（ロッチデール公正先駆者組合）に匹敵するものであったといえる。

4. 3 起業家としての高橋九郎

4. 3. 1 神谷信用組合の創設

高橋九郎は、「「農業というものは、個人で行っては苦勞のみ多くして、生産は上がらない。だから、皆で力を合わせてやれば能率も上がるし、楽しく、しかも生産も上がる。」と古くから言われているが、これを悪用し、農民統制の材料にしたのが、江戸時代の五人組の制度である。」という言葉の持つ真理を正しく受け止め、皆が力を合わせてやる「組合」を設立した。1904年（明治37年）のことである。お金を預かり、貸し付ける金融業務をはじめ、農業技術の指導、農業用品や生活用品の共同購入、災害時の保障、農業経営の合理化指導などを行って農民の便を図った。これは、現在の農業協同組合のもととなるものであった。

この組合は年々発展の道をたどり、内容充実・成績優秀であったことから、数度の全国表彰を受けた。神谷信用組合は、信用組合として全国有数の歴史を誇り、現在の「こしじ農協」に引き継がれている。

当初の建物は現存しないが、1928年（昭和3年）に新築された鉄筋コンクリートの建物は現在も神谷の地に存続している。2009年（平成21年）11月には神谷地区が買い取り、神友館と名を変え、地域の人達の活動の場として利用されている。

図表4－3－1 創立当時の神谷信用組合の事務所



創 立 当 時 の 事 務 所

図表 4－3－2 創立当時の神谷信用組合の事務所



図表 4－3－3 現在の神谷信用組合



なお、神谷地区が神谷信用組合の建物を買い取ったのは、以下の理由からである。

- ①神谷の歴史を物語る遺産である。
- ②大地主の高橋九郎を中心としてすすめられた「地区の産業活性化」の象徴的な建物である。
- ③産業史・建築的視点からの価値が高い。
- ④保存と活用を通して神谷の歴史と文化を後世に伝える。
- ⑤歴史的な建物の保存活動を通して住民間の交流を図る。

4. 3. 2 神谷銀行について

神谷銀行は、1916 年（大正 5 年）8 月に高橋九郎等によって設立され、1934 年（昭和 9 年）4 月に六十九銀行（現北越銀行）に合併されるまで地域の主要な銀行であった。

1921 年（大正 10 年）4 月に貯蓄銀行法が制定された。貯蓄銀行法は、貯蓄銀行の業務範囲を貯蓄預金および一定の付随業務のみとし、預金者保護に重点をおき、資金運用についてきびしい制限を加えたものである。

神谷銀行は、個人の貯蓄を引き受け、庶民の生活をより安定的なものとすることを目的とした公益的な金融機関であったが、この貯蓄銀行法の施行に伴って貯蓄銀行業務兼営を廃止し、貯蓄銀行となった。この際の公称資本金は 5 0 万円（現在の貨幣価値にして約 3 9 0 億円）であった。以下の表は、貯蓄銀行法が施行された際に存続していた銀行が、どういった対応をとったのかをまとめたものである

図表 4－3－4 新潟県内貯蓄銀行の異動状況

貯蓄銀行法施行に伴う新潟県内貯蓄銀行の異動業況（普通銀行を含む）				
銀行名	公称資本金	異動状況		
	万円			
長岡貯蓄銀行	100	普通銀行に転換	長岡商業銀行	と商号変更
新潟貯蓄銀行	70	〃	新潟農商銀行	〃
新潟貯金銀行	50	〃	新潟商業銀行	〃
吉田貯蓄銀行	30	〃	西吉田銀行	〃
大和川貯蓄銀行	25	〃	大和川銀行	〃
柏崎貯金銀行	20	〃	柏崎農商銀行	〃
村上貯蓄銀行	15	〃	村上産業銀行	〃
葛塚貯蓄銀行	10	〃	葛塚銀行	〃
高田貯蓄銀行	10	〃	上越高田銀行	〃
三条貯金銀行	7	〃	三条工商銀行	〃
六十九銀行	1000	貯蓄銀行兼務経営の廃止		
長岡銀行	1100	〃		
新潟銀行	400	〃		
小千谷銀行	150	〃		
柏崎銀行	120	〃		
加茂銀行	100	〃		
栃尾銀行	100	〃		
村上銀行	100	〃		
今町銀行	100	〃		
見附銀行	100	〃		
十日町銀行	80	〃		
村松銀行	50	〃		
小出銀行	50	〃		
六日町銀行	50	〃		
神谷銀行	50	〃		
越後銀行	50	〃		
地藏堂銀行	50	〃		
白根銀行	50	〃		
巻銀行	50	〃		
塩沢銀行	50	〃		
燕銀行	32	〃		
寺泊銀行	30	〃		
佐渡銀行	32	〃		
与板銀行	15	〃		

1934 年（昭和 9 年）に六十九銀行に合併されたのは、関東大震災や 1929 年（昭和 4 年）に起こった世界恐慌と 1930 年（昭和 5 年）の昭和恐慌の影響で深刻なデフレが起こり、日本経済が疲弊したために銀行の経営がうまくいかなかったためと考えられる。

4. 3. 3 両毛鉄道について

両毛鉄道は、両毛地方から東京や横浜といった都市部へ絹織物を輸送するために敷設された鉄道である。1887 年（明治 20 年）に開通し、1897 年（明治 30 年）に日本鉄道に合併された。

江戸時代から両毛機業地における織物生産は発達しており、明治時代に入るとそれは益々発展した。その発展に伴って物資の輸送量も増大し、特に 1882 年（明治 15 年）頃からは織物の輸出も見られるようになった。これにより織物生産量と輸送量はより一層増大し、これらを輸送する輸送力を補うためには鉄道の敷設が最も効率的な方法であるという認識が、機業関係者を中心して持たれるようになった。両毛鉄道が設立されたのは 1886 年（明治 19 年）であり、全線が開通

したのはそれから3年後の1889年（明治22年）のことである。

高橋九郎も両毛鉄道に経営者として関わっていたことを両毛鉄道の上位20名の主要株主を示した図表4-3-5から図表4-3-8は示している。

表4-3-5 第6期（1890年上期）

順位	姓名	居住地	株式数(株)	比率(%)	職業等
1	西脇国三郎	新潟	3,768	12.6	第四国立銀行取締役
2	原 秀次郎	和歌山	2,000	6.7	第四十三国立銀行取締役・鉱山業経営・酒造業
3	第四銀行取締役・西脇国三郎	新潟	1,000	3.3	
4	西脇悌次郎	東京	928	3.1	元横浜正金銀行取締役・新潟物産社長
5	多屋寿平次	和歌山	780	2.6	林業・大地主 元第四十三国立銀行取締役
6	高橋 九郎	新潟	732	2.4	第六十三銀行取締役
7	中村 久	和歌山	687	2.3	
8	佐藤甚兵衛	東京	562	1.9	旧肥前大村藩主家扶
9	下村忠兵衛	東京	504	1.7	呉服木綿問屋
10	馬越 恭平	東京	500	1.7	三井物産横浜支店長・下野煉瓦取締役社長
11	橋爪清九郎	神奈川	500	1.7	三井物産店員
12	津久居彦七	栃木	450	1.5	綿糸販売業・佐野銀行頭取
13	野本忠次郎	東京	407	1.4	株式仲買業
14	近藤 善助	東京	400	1.3	今村銀行取締役
15	安田善次郎	東京	400	1.3	安田銀行監事
16	菊池長四郎	東京	340	1.1	東海銀行頭取
17	本野小平	宮城	324	1.1	
18	最賀総左衛門	東京	308	1.0	質商
19	常見喜太郎	群馬	390	1.3	織物製造業
20	星名佐藤次	東京	336	1.1	

表4-3-6 第13期（1893年下期）

順位	姓名	居住地	株式数(株)	比率(%)	職業等
1	西脇国三郎	新潟	3,768	12.5	第四国立銀行取締役・金融会社頭取・小千谷町長
2	原 秀次郎	和歌山	2,000	6.0	第四十三国立銀行取締役・鉱山業経営・酒造業
3	高橋 九郎	新潟	1,000	2.4	第六十九国立銀行取締役
4	織田昇次郎	東京	928	2.1	
5	多屋寿平次	和歌山	780	2.0	林業 大地主
6	亀田介治郎	東京	732	1.9	
7	佐藤甚兵衛	東京	687	1.8	旧備前大村藩主家扶
8	塚本合名会社	東京	562	1.7	呉服木綿売買
9	石崎 政蔵	東京	504	1.3	小山銀行取締役・株米倉庫専務
10	小宮山良展	東京	500	1.3	
11	馬場 金助	東京	500	1.2	
12	中村平次郎	東京	450	1.2	
13	西村 覚蔵	東京	407	1.2	東株仲買人
14	菊池長四郎	東京	400	1.0	東海銀行監事・日本織物会社監査役・株米倉庫監査役
15	丹羽 長平	群馬	400	1.0	日本織物会社取締役
16	津久居彦七	栃木	340	1.0	佐野銀行取締役・綿糸業
17	山口達太郎	新潟	324	1.0	第百三十九国立銀行取締役・柏崎銀行取締役(山口権三郎息)
18	長江 定助	東京	308	1.0	米商(長江商会会長)
19	常見喜太郎	群馬	390	1.0	綿糸製造業
20	岡崎 延蔵	栃木	336	0.9	多額納税者

表4-3-7 第16期(1895年下期)

順位	姓名	居住区	株式数(株)	比率(%)	職業等
1	西脇国三郎	新潟	3,758	12.5	第四国立銀行取締役・金融会社頭取・小千谷町長
2	原 秀次郎	和歌山	1,800	6.0	第四十三国立銀行取締役・鉱山業経営・酒造業
3	高橋 九郎	新潟	732	2.4	第六十九国立銀行取締役・小千谷銀行
4	多屋寿平次	和歌山	600	2.0	林業 大地主
5	岩崎 茂元	東京	569	1.9	
6	石崎 政蔵	東京	500	1.7	小山銀行取締役・(株)米倉庫専務
7	馬場 道久	富山	460	1.5	帝国海上保険監査役
8	亀田介治郎	東京	400	1.3	
9	塚本合名会社	東京	395	1.3	呉服木綿売買
10	中村平次郎	東京	370	1.2	
11	菊池長四郎	東京	340	1.1	東海銀行監事・日本織物会社監査役・(株)米倉庫監査役
12	佐藤甚兵衛	東京	315	1.1	旧備前大村藩主家扶
13	小林庄太郎	栃木	310	1.0	貸金業
14	須藤 ツル	東京	310	1.0	元東株仲買人(須藤吉右衛門)関係者
15	山口達太郎	新潟	300	1.0	第百三十九国立銀行取締役・柏崎銀行取締役(山口権三郎息)
16	津久居彦七	栃木	300	1.0	佐野銀行取締役・綿糸業
17	長江 定助	東京	300	1.0	米商(長江商会会長)
18	常見喜太郎	群馬	290	1.0	綿糸製造業
19	原 宏太郎	和歌山	257	0.9	
20	小千谷銀行頭取・ 西脇国三郎	新潟	250	0.8	小千谷銀行頭取

表4-3-8 第18期(1896年下期)

順位	姓名	居住地	株式数(株)	比率(%)	職業等
1	西脇濟三郎	新潟	3,588	12.0	西脇国三郎息
2	原 秀次郎	和歌山	1,800	6.0	第四十三国立銀行取締役・鉱山業経営・酒造業
3	田中 新七	神奈川	1,280	4.3	鉄道資本家・横浜取引所理事
4	高橋 九郎	新潟	732	2.4	第六十九国立銀行取締役
5	長江 定助	東京	600	2.0	米商(長江商会会長)
6	石崎 政蔵	東京	500	1.7	(株)東京精米社長・小山銀行取締役・(株)米倉庫専務
7	岩下善七郎	栃木	500	1.7	第四十国立銀行取締役・第四十一国立銀行取締役
8	中村 清蔵	東京	390	1.3	証券業者
9	西脇 寛蔵	新潟	370	1.2	小千谷銀行頭取
10	馬場 道久	富山	360	1.2	(株)上海紡績監査役
11	稲葉 兼吉	東京	360	1.2	東株仲買人
12	津久居彦七	栃木	357	1.2	佐野銀行取締役・綿糸業
13	菊池長四郎	東京	310	1.0	東海銀行監事・第四十一国立銀行取締役・日本織物会社監査役・ (株)米倉庫監査役
14	小林庄太郎	栃木	310	1.0	貸金業
15	福島 浪蔵	東京	310	1.0	東株仲買人
16	多屋寿平次	和歌山	300	1.0	林業 大地主
17	須藤 ツル	東京	300	1.0	元東株仲買人(須藤吉右衛門)関係者
18	常見喜太郎	群馬	290	1.0	綿糸製造業
19	森 重固	鹿児島	270	0.9	島津家家扶
20	原 宏太郎	和歌山	257	0.9	

両毛鉄道は営業全般を日本鉄道に業務委託していたが、業務委託契約は 1892 年にその期限が切れることになっていた。この業務委託契約を継続しようとしたが、日本鉄道から拒否されてしまった

そこで両毛鉄道は、この 8 月の契約終了期限をもって、日本鉄道から完全に独立して営業を行うべきか、それとも日本鉄道に吸収されるべきかを決定しなければならない問題が生じた。この時、日本鉄道からの独立を望む「非売却派」の立場に立ったのは、西脇や原、高橋九郎といった地方株主であった。両毛鉄道は、非売却派の地方資産家や地元住民の後押しによって日本鉄道から独立自営することが決定した。高橋九郎等の新潟株主は実際に経営を主導し、自らの手で企業価値を最大化させようと積極的に動いた。

高橋九郎は 1892 年（明治 25 年）と 1894 年（明治 27 年）に監査役、1895 年（明治 28 年）から 1896 年（明治 29 年）にかけて取締役就任している。

表 4－3－9 両毛鉄道役員一覧

	1887年	1888年	1889年	1890年	1891年	1892年	1893年	1894年	1895年	1896年	1897年
田口 卯吉	社長	→									
木村半兵衛	副社長	→			監査役	→					
小松 彰	取締役										
菊池長四郎	取締役	→				取締役	→				清算人
浅野総一郎	取締役	→									
佐羽吉太郎	取締役	→									
安田善次郎	監査役	→			→						
今村清之助	監査役	→			→	社長代理					
正田章次郎	監査役	→	取締役		監査役						
伴 直之助	支配人	→				→					
仲田 信亮	副支配人	→									
乙骨太郎乙		取締役	→								
小野 金六			取締役	→							→
西脇倭次郎			取締役	→							
山中隣之助			監査役	→	取締役	→					
奈良原 繁				社長	→						
原 亮三郎				取締役							
原 秀次郎				取締役							
岩下善七郎					取締役	→					→
西脇国三郎					取締役	社長兼任	取締役	→			
渡辺 洪基						社長	→				清算人
馬越 恭平						監査役	→		監査役	→	
高橋 九郎						監査役		監査役	取締役	→	
丹羽 長平							監査役				
仁礼 敬之								支配人			
山口権三郎								監査役			
樺山喜平次									支配人	→	清算人
田中 新七										取締役	
西脇 寛蔵										監査役	清算人

4. 3. 4 銀山拓殖株式会社について

銀山拓殖株式会社は、銀山平（現在の魚沼市）を開拓し人々を入植させることを目的として設立された株式会社である。日露戦争のあと、地域の地主・有力者が集まる機会があり、その時に「何か社会のためになる有益な事業を興そう」という話が小出町の櫻井庄平持ち上がった。この意見に賛同し、1905 年（明治 38 年）から 1909 年（明治 42 年）まで創業計画の立案や準備を行い、1910 年（明治 43 年）に銀山拓殖株式会社は設立された。

銀山拓殖株式会社の資本金は 10 万円、株主は 9 人であった。櫻井庄平の意見に賛同した発起人

がそのまま株主となった。

株主となったのは、

小千谷町	西脇済三郎
同町	西脇新次郎
同町	高野又七
堀之内町	森山汎愛
広瀬村（当時）並柳	関矢橋太郎
同村田尻	酒井文吉
小出町小出島	渡辺寛蔵
同町	櫻井庄平

三島郡来迎寺村（当時）大宇宮川 高橋九郎

の9人である。

この9人がそのまま役員となった。役員は次の通りである。

取締役社長	西脇済三郎
専務取締役	櫻井 庄平
常務取締役	渡辺 寛蔵
取締役	酒井 文吉
同	高橋 九郎
監査役	関矢橋太郎
同	西脇新次郎

また、その当時の株主名簿には持ち株数が次のように書かれている。

小千谷町	西脇済三郎	一七〇株
来迎寺	高橋 九郎	一四〇株
廣瀬村	酒井 文吉	一〇〇株
同	関矢橋太郎	一〇〇株
小千谷町	西脇新次郎	一〇〇株
堀之内町	森山 汎愛	九〇株
東 京	久保田右作	九〇株
小出町	渡辺 寛蔵	九〇株
同	櫻井 庄平	七〇株
来迎寺	高橋 逸平	三〇株
小千谷町	山本 普	一〇株
小出町	櫻井 岩治	一〇株

会社発足後の九月には県下各地から学術専門家、新聞記者その他有力者を集めた「銀山平開墾地調査団」が組織され一行 50 余人が約一週間現地調査に入り測量などを行った。

月日は明確ではないが、会社設立の関係者一同が銀山平を訪れ、恋ノ岐温泉の露天風呂に入っている人やその周囲に集まっている人たち、およびそれらの人たちが一同に会した記念写真が残されている。

銀山拓殖株式会社の支援は金銭的な支援にとどまらず道路の舗装や入植者の募集、入植者住宅

の建築など多岐にわたっていた。また、人々が入植した年だけでなく継続的に支援を行っていた。というのも銀山平がもともと原野や森林であったからである。農地として開拓するためには樹木を切り倒して運び出し、そのあと土を掘り返して耕さなくてはならない。作物を作りある程度自給できるようになるまでは生活物資を里から運び上げていた。また出作りのように仮小屋に住むわけにはいかないため、入植者が定住し続けられるように家の建築資金を融通してやるなどの便宜を図り援助した。

4. 4 政治家としての活躍

家督を継いで間もない九郎は、数理能力や測量技術、熱き公共精神が評価されて地租改正にかかわる地域の測量義務に選ばれ、尽力した。この活躍を通して地域の住民から信頼と敬慕を得ることとなり、地方自治に参画していく契機となった。そして、1878年（明治11年）に16大区小6区受け持ちの副大区長に就任した。

1981年（明治14年）31歳で宮川・道半村の区長に選出され、信濃川・渋海川合流地域の治水事業に奔走した。1984年（明治17年）、34歳で宮川新田始め10か村連合の区長に推された。この事実は、若くして既に地域住民から敬慕を集めていたことを示している。1894年（明治27年）3月、第3回衆議院議員総選挙において、自由党（後の政友会）推薦で立候補して当選し、国会に登場した。当時の来迎寺村における初の帝国議會議員を勤めた。この時44歳であった。

図表4-4-1 第3回衆議院議員総選挙時の各県の当選者

青森県	1区	源晟		工藤行幹	2区	柳喜洋芽	3区	菊池九郎		
岩手県	1区	谷河尚忠	2区	小笠原定一	3区	佐藤昌蔵	4区	下飯坂権三郎	5区	平田箴
宮城県	1区	草刈親明	2区	武者伝次郎	3区	後藤敏康	4区	大場長九郎	5区	首藤陸三
秋田県	1区	目黒貞治	2区	横山勇喜	3区	野出鎧三郎	4区	坂本理一郎		武石敬治
山形県	1区	佐藤里治		佐竹正詮	2区	山下千代雄	3区	駒林広運		阿部孫左衛門
	4区	重野謙次郎								
福島県	1区	小笠原貞信	2区	平島松尾	3区	河野広中		吉田正雄		
	4区	山口千代作		柴四朗	5区	愛沢寧堅				
茨城県	1区	関戸覚蔵		関信之介	2区	大津淳一郎		野口勝一	3区	浜名信平
	4区	初見八郎	5区	大久保端造	6区	斎藤斐				
栃木県	1区	星亨	2区	田村順之助		新井章吾	3区	田中正造	4区	塩田奥造
群馬県	1区	新井毫	2区	金井貢	3区	中島祐八	4区	木暮武太夫	5区	清水永三郎
埼玉県	1区	加藤政之助	2区	福田久松		高田早苗	3区	新井啓一郎		野口鑿
	4区	湯本義憲		斎藤珪次	5区	原善三郎				
千葉県	1区	千葉禎太郎	2区	小倉良則		四宮有信	3区	板倉中	4区	西村甚右衛門
	5区	伊藤徳太郎	6区	高橋喜惣司	7区	鈴木省三	8区	安田勲		
神奈川県	1区	島田三郎	2区	山田泰造	4区	山田東次	5区	山田嘉穀	6区	福井直吉
山梨県	1区	斎藤卯八	2区	依田道長	3区	加賀美嘉兵衛				
東京府	1区	末吉忠晴	2区	桧山鉄三郎	3区	稲田政吉	4区	楠本正隆	5区	奥三郎兵衛
	6区	高梨哲四郎	7区	角田真平	8区	阿部孝助	9区	鳩山和夫	10区	林和一
	11区	浅香克孝	12区	高木正年	13区	中村克昌		石坂昌孝		
新潟県	1区	萩野左門	2区	丹後直平		佐藤力作	3区	佐藤定七	4区	大竹貫一
	5区	高橋九郎		長谷川泰	6区	内藤久寛	7区	岡村貢		久保田右作
	8区	室孝次郎		太田孫次右衛門	9区	松本八十八				
富山県	1区	関野善次郎		原弘三	2区	野村修造	3区	稲垣示	4区	島田孝之
石川県	1区	松田吉三郎		吉本栄吉	2区	梅田五月	3区	真舘貞造		浅野順平
	4区	小間肅								
福井県	1区	竹尾茂	2区	杉田定一	3区	黒田道珍	4区	時岡又左衛門		
長野県	1区	小島相陽	2区	島津忠貞	3区	佐藤八郎右衛門	4区	川上源一		森本省一郎
	5区	木内信	6区	中村弥六	7区	伊藤大八				
岐阜県	1区	大野亀三郎	2区	岸小三郎	3区	高木貞正	4区	松原芳太郎	5区	須田万右衛門
	6区	浅見与一右衛門	7区	永田吉右衛門						
静岡県	1区	井上彦左衛門	2区	影山秀樹	3区	広住久道	4区	丸尾文六	5区	足立孫六
	6区	松島廉作	7区	田中鳥雄		大村和吉郎				
愛知県	1区	国島博	2区	小室重弘	3区	江崎均	4区	倉知伊右衛門	5区	森東一郎
	6区	加藤喜右衛門	7区	天野伊左衛門	8区	太田善四郎	9区	今井磯一郎	10区	加藤六蔵
	11区	三浦碧水								

この国会は同年6月解散となったが、1898年（明治31年）8月の第6回総選挙に再度立候補

して再び当選した。1902 年（明治 35 年）まで国政に参加し、国政の場においても活躍した。

旧越路町域出身の国会議員は、後に大地主互選の貴族院議員に当選した塚山出身の長谷川赳夫氏と高橋九郎の 2 人だけである。後に東京に出て活躍する長谷川氏に対して、高橋九郎氏は議員時代もその関心を地元地域へ向けていた。

5. マップの作成

5. 1 マップづくりの意義

長岡市神谷地区は地域のコミュニティーが確立している上に、旧来迎寺村一帯を所有する大地主が住んでいたために歴史的な遺産や建造物が数多くあることから地域の魅力を発信する要素に恵まれていると考え、平成 21 年度から活動してきた。今回は、長岡市神谷地区の基礎を築いただけでなく、世界に影響を与えた高橋九郎という人物を後世に語り継ぐ方策を考えることにした。

高橋九郎がこの世を去ってから 94 年もの月日が流れ、今では高橋九郎の残した功績を知り、語れる人は居なくなりつつある。また、深くかかわった神谷地区の住民の間でもその功績は忘れ去られようとしている。さらに、近年もみじ園が注目を浴びているが、それを建造した高橋九郎のことはほとんど知られておらず、神谷地区の方々はそのことをとても悲しいことだと言っていた。そこで私たちは高橋九郎を語り継ぐことは、神谷地区の誇りを後世につなぐ架け橋になるのではないかと考え活動を進めることにした。

高橋九郎を語り継ぐということは、長岡市神谷という地域に高橋九郎という人物がおり、地域発展のために様々な活動を行ったということを広めることだと考えた。そこで、高橋九郎の業績と関連史跡を記録し、それを後世に伝えて行く方法を考えることにした。また、高橋九郎に興味を持った人が、もみじ園をはじめとする「ゆかりの場所」を訪ねる手助けとなる方法も併せて考えることにした。その結果、高橋九郎を題材とした「高橋九郎マップ」を作ることにした。

私たちは、この活動をするまでは高橋九郎という人物のことを全くと言っていいほど知らず、高橋九郎がどういう人で何をし、どんな影響を与えてきたのか、何も知らなかった。しかし、文献調査や地域住民の方々から話を聞くことを通して、高橋九郎という人物がいかに偉大な人物で、地域のために活躍し、今の神谷の基を作っただけでなく、世界にも影響を与えた人物だということが分かった。長岡、新潟を代表する偉人の一人に数えることができる高橋九郎という人物が、地元神谷地区でも忘れ去られようとしていることにとっても危機感を覚えた。私たちが作る「高橋九郎マップ」を通して、多くの人たちに神谷の偉人「高橋九郎」を知ってもらえたらと考え活動した。

5. 2 マップのコンセプト

5. 2. 1 マップに対する基本的考え方

今回作成したマップの基本コンセプトは、「高橋九郎の足跡を容易に辿れて、伝えられるマップ」である。

そこで作成したマップでは、高橋九郎の活躍内容や関係する個所・建物などを現在の地図上に再現し、実際に現地をたどる時の手助けをするマップを作ることにした。さらに、高橋九郎の功績が容易に伝わるように、活躍した分野を“地主、企業家、政治家”の三分野に分けて人物を紹介することにした。デザインに関しては、マップを片手にしながら現地を歩くことで神谷の人達が地区内に残る高橋九郎の業績を再認識でき、かつ多くの方々に神谷の魅力が伝わり・訪問してみようかという気を起こさせる、実用性に富んだ内容のデザインにすることにした。またマップ内の掲載情報と内容が重複せず、互いを補完するマップにすることを目指した。

5. 2. 2 マップ作成のポイント

マップ作成で工夫したポイントは、以下のとおりである。

① 紹介内容と所在場所が連動するよう地図を工夫し、説明は別枠で配置した。

文字だけで高橋九郎の魅力を紹介するのは難しいと考え、高橋九郎に関する施設や文化財の所在場所を地図上に示すことにした。希望する施設の所在場所を見つけやすくするために、施設の所在場所は地図上に番号で示し、番号と施設の名称の対応表を地図の下に載せることにした。また、別枠で説明文を載せることで、功績の内容が伝わるようにした。さらに、別ページに掲載されている神谷信用組合、神谷とチューリップの関係、果樹園などに関する情報は関連した場所を地図に示すことで情報掲載面と地図の連携を取るようにした。これにより、掲載情報とその場所がイメージしやすくなり、実際に現地を訪れて功績を辿ってもらう際のガイドマップとしても利用できるものとなった。

② 地図を手書きにして、親近感を持たせる。

マップに対する親近感を高めるために、地図の部分はすべて手書きにした。また、あまり細かい道は書き込まない、高橋九郎が関係した場所毎に色分けをする等して、視覚的にイメージしやすいようにした。カラフルな手書きの地図にすることでマップが華やかになり、親近感を持たせることができた。また、高橋九郎のゆかりの場所の名称や国道、番号などの文字をパソコンで打ち込むことで読みやすさに配慮した。これにより、一層見やすい仕上がりになった。

③ 高橋九郎の功績を地主、企業家、政治家の3つに分類して紹介した。

高橋九郎の功績をただ並べただけでは、全体像を把握することが難しいと考えた。またマップを手にとってもらった際に高橋九郎がどういうことをしたのかあまり印象に残らないのではないかと考え、功績を“地主、企業家、政治家”という大きく三つのジャンルに分けて紹介することにした。

④ 高橋九郎の一生を年表にまとめた。

掲載できる量に限りがあるマップでは高橋九郎の功績をすべて伝えきれないため、年表を入れ、高橋九郎の一生を一目でわかるようにまとめた。高橋九郎の生涯を年表にして表したのはこれまでどこに存在していないため、高橋九郎の生涯を紹介する資料として、様々な場で活用できるものと考えている。

⑤ 古い文献は、現代表記に変換した。

図書館などに残っている文献は、古い文献が多く読むのに苦労した。古文を理解できる大人たちだけでなく、小さな子供からもこのマップを手にとってもらって神谷の魅力に触れてもらいたいと強く考えていたので、老若男女すべての人たちにわかりやすく読みやすいよう現代表記に変換した。

⑥ ゆかりの場所や国道・公共交通手段を記載した。

地図内に方面、国道名や県道名を記載することにより地図としての実用性を高め、地元以外の人にも足を運びやすいようにした。さらに、神谷までの交通手段として電車を利用した場合とバスを利用した場合の2方法を記入した。これにより、地元の方々だけでなく外部の方々からも神谷に足を運んでもらい、神谷と高橋九郎の魅力について触れてもらえるようにした。

5. 3 マップの作成

5. 3. 1 資料収集・調査

高橋九郎の功績を辿るマップを作るというテーマが決まってから、図書館などを利用し高橋九郎に関する文献を集め、資料調査を行った。情報は様々な文献に載っていたため担当する分野を決めて、資料収集と調査を行った。

その後、集めた文献を各自持ち寄って整理、編集する中で高橋九郎の功績を“地主、企業家、政治家”の3つの分野に分けることができた。この3分野を軸にして高橋九郎を紹介するマップにすることにし、マップのおもて面では“政治家、地主、企業家”という3方向から高橋九郎を紹介することにした。うら面では高橋九郎ゆかりの地を紹介する地図と説明、年表を入れることにした。

5. 3. 2 マップのおもて面

高橋九郎マップのおもて面には、表紙や人物紹介、活動の概要のほかに高橋九郎の主な活躍を“地主、企業家、政治家”の3つの分野に分けて紹介した。実際には、マップのスペースの関係もあって、“政治家、地主、企業家”の順で紹介することとなった。

以下に実際にマップのおもて面に入れた項目を説明する。

i 政治家としての高橋九郎

- ・明治初期の帝国議会の衆議院議員にも選ばれ、当時の産業組合の創設者となり、新潟県内の産業組合組織の発展に力を尽くした。
- ・第十六代区小六区戸長に就任。
- ・宮川、道半村の区長に選ばれる。信濃川と渋海川の合流地域の治水事業を行う。
- ・宮川新田をはじめ10か村連合の区長に推薦される。
- ・第三回衆議院議員総選挙において自由党推薦で当選し国会議員となる。

ii 地主としての高橋九郎

- ・農業技術者でもあった高橋九郎は、旧態依然たる藩政的な農業政策ではなく、農民みんなが幸せになる近代的農業の確立を考えていた。私財を惜しみなく農業技術の向上と地域住民の暮らしを豊かにするために使い、率先して地域振興に努めた。
- ・耕地整理と暗染排水の施行。
- ・共同苗代と果樹園、昼表や花庭などによる副業の推奨。
- ・気象旗、時の鐘の設置、運用。
- ・養蚕の推奨。

iii 企業人としての高橋九郎

- ・農業経営のみならず、地元商工業の発展のためにも尽力を惜しまなかった。
- ・神谷信用組合の設立。
- ・神谷銀行の設立。
- ・鉄道事業への参画。
- ・日本石油会社への参画。
- ・長岡病院（現 長岡赤十字病院）設立への参画。

5. 3. 3 マップのうら面

高橋九郎マップのうら面は、活躍した場所と内容が一目で沁れる構成にした。その為マップの左側に地図を配置し、高橋九郎ゆかりの場所は番号を振って示した。ゆかりの場所に関係した説明文は、右側に配置した。また多くの功績を残した高橋九郎の生涯をまとめた年表も付けた。

以下にマップのうら面に入れた項目を示す。

i 神谷地区の地図

神谷地区の中心部の概略図を左側に配置し、高橋九郎が関係する場所を図の中に番号で示した。神谷地区内に16ヶ所もの関連史跡があることがわかった。

- ① 高橋家邸宅所在地 ② 船着場 ③ 時の鐘 ④ 果樹園 ⑤ プラタナスの大樹
- ⑥ 気象旗揚場所 ⑦ 献穀田 ⑧ 高橋家報恩記念碑 ⑨ 神谷神明社 ⑩ 共同作業所
- ⑪ 旧来迎寺村役場 ⑫ 火の見櫓 ⑬ 旧神谷信用組合 ⑭ 旧神谷小学校
- ⑮ 旧神谷信用組合事務所 ⑯ 新潟県チューリップ初開花場所

ii 高橋九郎に關係する場所の紹介

高橋九郎が関係した場所は神谷地区だけにはとどまらず、神谷地区のほかにも4ヶ所の関連史跡を地図で示した。

- ① 旧高橋家別宅であった「もみじ園」。最寄りの駅は JR 来迎寺駅。
- ② 木村鈍叟から漢学を学んだ「慈光齋」。長岡市浦の慈光寺境内。
- ③ 丸山貝陵より漢学を学んだ「耕読堂」。小千谷市片貝の浄照寺境内。
- ④ 養子に出された南魚沼市野絵乙の「後山」。最寄りの駅は JR 浦佐駅。

iii 主な業績の紹介

高橋九郎の業績中から主なもの5つを紹介した。

① 時の鐘

昔は一般の農家には時計がなく、時刻が知らせることができないため農事に不便であった。1882年（明治15年）、自宅倉庫の屋上に時鐘塔を設け、毎日午前11時と夜中0時の2回、釣鐘を打ち鳴らして時を知らせた。その音は遠く離れた村まで聞こえ、午前11時の時報を聞くと田畑に働く人々は昼食のため家に帰った。

② 気象旗

農業を行うのに晴雨や風力などを知る必要を痛感し、毎日（冬季を除く）新潟測候所から電報で取り寄せた天気予報を宅前の果樹園内に設けた予告塔に信号旗や警報標識を掲げることと知らせ、農家の便宜を図った。これは太平洋戦争中まで約40年間継続した。

③ 神谷とチューリップ

1904年（明治37年）ごろ水島義郎氏は、高橋九郎が衆議院議員当時の手ずるから入手したチューリップの球根を分けてもらい、神谷地内（旧道半村）の自宅の庭に植えた。太陽光で温めた井戸水を与えるなどして手塩にかけて育てたかいあって、きれいなチューリップが咲いた。これが新潟県内で初めて咲いたチューリップである。

④ ソメイヨシノ

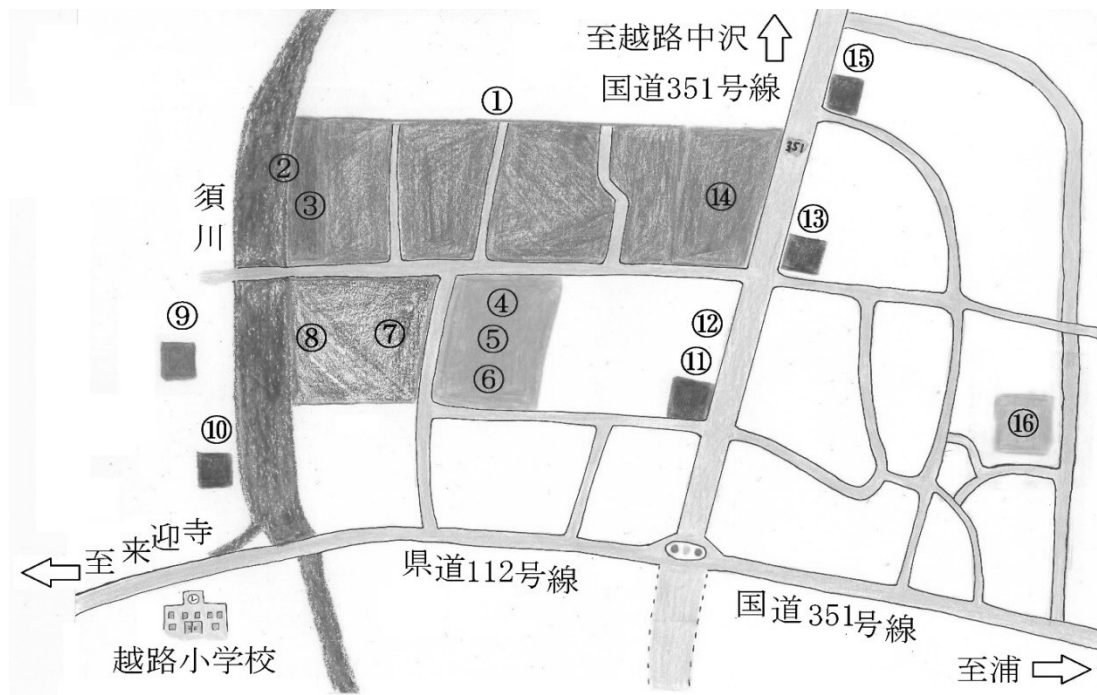
江戸末期につくられたソメイヨシノが新潟で育たないものかと東京から苗木を運び、巴が丘にある高橋家の別宅（現もみじ園）に植え、育成に成功した。この話が伝わり、長岡市悠久山に大量のソメイヨシノが移植されることになった。

⑤ 果樹園

自宅横に果樹園を作り、桃、柿、苺、梅などを試栽して、育つかどうかの実験を行った。
成果の見込まれるものについては、希望者に苗木を分け与えて、普及を図った。

マップ内に示した地図は、以下のとおりである。

図表 5－1 神谷地区内の地図



図表 5－2 もみじ園



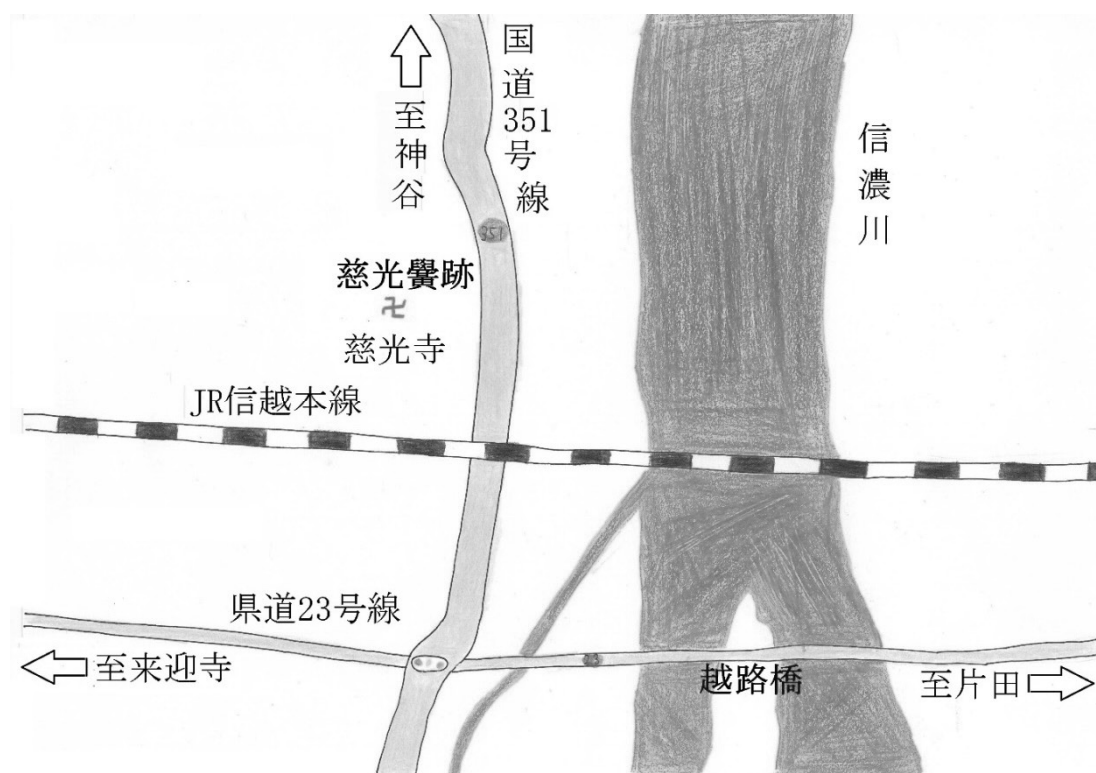
図表 5—3 後山



図表 5—4 耕読堂



図表 5—5 慈光巖



完成したマップを図表5-6から図表5-9に示す。

図表5-6 高橋九郎マップのおもて面の1



高橋九郎マップ!

(高橋家道景 昭和16年5月)

学校法人 長岡大学

製作：高橋治道ゼミナール3・4年生
(地域活性化プログラム)
平成27年

高橋九郎とは？

1850年、長岡市神谷の創元*である高橋家の9代目当主の長男として生まれる。地域振興に生涯を捧げた政治家・企業家・農家である。また地主として小作人を大事にしている「家族的親愛」（協調性を持って接する）ことを大前提とし、親分・子分の関係を築きました。

*創元…地方行政にあたった村役人の最上位の者。

高橋九郎の活動の概要

高橋九郎が神谷のみならず地域の為にした主な活動には、災害復興、耕地開発と改良等の産業基盤向上を目的とした事業等があります。また新潟県内で2番目となる神谷信用組合の開設・経営に当たりました。神谷信用組合は「全国の模範組合」と称されるほどに成長し、その意図は現在の「JAさんどう」へ受け継がれています。更に、共同苗代の導入、果樹園芸等の副業奨励、私設気象台や時を知らせる鐘（時鐘）の設置、県下チューリップ移植の活動を地域のために進めました。

その一方、信越本線や両毛鉄道の開設、銀山平や北海道の開拓、長岡赤十字病院の開設、北越銀行の前身である「神谷銀行」の設置等、事業家としても多くの成功績を残しました。その傍ら、政治家としても活躍し、帝国議会の衆議院議員を務めました。

このように数多くの功績を神谷や地域に残し、今でも「地主様」として多くの人に慕われています。

- 1 -

其の考～公人としての高橋九郎～

明治初期の帝国議会の衆議院議員にも選ばれ、当時の産業組合の創設者となり、新潟県内の産業組合組織の発展に力を尽くした。

明治11年 年若い父に代わり第16代区小六区戸長に就任。この時九郎は28歳。

明治13年 父の死により家督を継ぐが、家業の医業と行政の仕事で多忙を極めた。

明治14年 31歳で宮川・道半村の区長に選ばれる。信濃・渋海合流地域の治水事業をおこなった。

明治17年 34歳で宮川新田始め10か村連合の区長に推薦される。

明治27年3月 第3回衆議院議員総選挙において、自由党（後の政友会）推薦で立候補し当選、国会議員となった。この時44歳。

明治31年8月 第六回総選挙に再度立候補して再び当選する。同三十五年まで国政に参与し、国政の場においても活躍した。



図表5-7 高橋九郎マップのおもて面の2

其の式 ～地主としての高橋九郎～

農業技術者でもあった高橋九郎は、旧態依然たる藩政的農業政策でなく、農民みんなが幸せになる近代的農業の確立を考へる模範としていた。そこで、私財を惜しみなく農業技術の向上と地域住民の暮らしを豊かにする為に使ひ、率先して地域振興に努めました。

★耕地整理と暗渠排水の施工

得意な数理の測量技術を生かして、農業用水路の整備・小河川の改修などの水利事業を積極的に行った。

昔から神谷地区の田んぼの区画は乱雑で、排水や農道の不備による稲作上の支障が多かった。また渋海川の氾濫が甚しい状態であった。明治39年当時、本県では珍しかった耕地整理を約百町歩に亘って行った。また、私財を投じて暗渠排水を設置したが、県下にその技術者がおらず、熊本県より技師を招いて施工した。

この事業は、農業の労苦の一つを軽減するだけでなく、地域の農業収量を増大させた。

★共同苗代と果樹園、曇表や花垣などによる副業の推奨

明治41年には県内最初の共同苗代を設け、入道稲、薄層を奨めて健苗の育成を図った。また、誘蛾灯の設置、馬糞や正条植を奨励するなどの農事の改良を行った。

競わせることで農業全体の質を高めるために、永年に亘り優良納米の小作者を表彰して産米の品質向上に努めた。

単作地帯における農家の収入が少ないことや天候や災害で収入が得られないことも多くあったことから副業に著目し、屋敷内の雑木を伐採して果樹の栽植を始めたり、明治36年には自費で製種工場を建て、岡山県から技術者を招いて曇表や花垣の製種法を人々に教えた。

其の参 ～企業人としての高橋九郎～

高橋九郎は農業経営のみならず、地元商工業の発展のためにも尽力を惜しまなかった。

★神谷信用組合の設立

明治29年に始まった私設線北越鉄道の工事は、農民に多大なる買入れの収入をもたらしたが、当時貯蓄思想に乏しく、奢侈の弊風と徳義の頹落をもたらした。また明治29・30両年の大洪水は、生活の足を失わせるものであった。奢侈の弊風を矯正し、信用道德の尊重を促めるために、明治37年に有限責任神谷信用組合を設立し、初代組合長となった。神谷信用組合の活動は国内のみならず、海外からも注目され、明治44年10月には英国のウェット夫婦の訪問を受けた。

★神谷銀行の設立

地元商工業発展のための金融機関として、神谷銀行を大正5年に設立した。のちに国立第六九銀行と合併し、現在の北越銀行へと引き継がれている。また、第六九銀行、与板銀行、関原銀行、新潟県農工銀行等の銀行経営に関与し、地元発展に寄与した。

★鉄道事業への参加

北越鉄道（現JR信越本線）の現ルートを推進し、鉄道開設に尽力した。両毛鉄道の第2位の大株主として、北越鉄道の計画に関係した。

★その他

日本石油会社（現JX日鉱日石エネルギー）の設立や長岡病院（現長岡赤十字病院）の設立に関与した。また、北海道の開拓や銀山平の開拓に関わった。

図表5-8 高橋九郎マップのうら面-左側-



図表5-9 高橋九郎マップのうら面-右側-

～神谷信用組合～

1896年(明治29年)から始まった北越鉄道(現JR信越本線)の工事は近隣の農民に土木工事の労働需要をもたらした。その資金収入が農家を潤しました。しかし、番付の弊害をもたらしたことから、高橋九郎は、番付放棄の風習を正し、信用造詣を尊重するため、そして協同一致の考えの啓発及び地産と消費の良風を醸成するために、果下2番目の信用組合となる有限責任神谷信用組合を1904年(明治37年)に設立しました。この組合は年々発展の道をたどり、内容が充実し、成績が優秀であったことから農産の全国表彰を受け、信用組合として全国有数の歴史を誇りました。神谷信用組合は、現在の北越線さんとうのルーツとなりました。1911年(明治44年)シドニーとビクトリアのウェブ夫妻は、世界調査旅行の途中、社会調査のため来日し、神谷信用組合の調査も行いました。高橋九郎は、当時の高橋家の巴ヶ丘別荘(現もみじ園)で夫妻を歓待し、宿泊でもてなしました。このことから神谷信用組合は、世界的に注目されていたことがわかります。

～時の鐘～

昔は一般の農家には時計がなく、時刻が知られることができないのは農事に不便でした。高橋九郎は1883年(明治15年)、自宅の屋上に時刻塔を設け毎日午前11時と午前0時の2回、鐘を打ち鳴らして時を知らせました。その音は遠くの他村にまでも聞こえ、午前11時の時報を聞くとは畑に働く人々は昼食のため定々茶路につくの常としたものです。

～気象旗～

農業を行うのに晴雨・強風・風力を知る必要を感じていた高橋九郎は、1906年(明治39年)から毎日(夜を除く)気象観測所から電報で気象予報を知らせてもらい、宅前の果樹園内に設けた高さ20mの電報塔に気象旗や観測機器を掲げ、翌日の天気を知らせて農家の便宜を図りました。これは太平洋戦争中までの40年間続きました。

～神谷とチューリップ～

1904年(明治37年)、遊幸村(現長岡市神谷)に住む水島義郎は、高橋九郎が常務理事議員当時の調子から入手したチューリップの球根を分けてもらい、自宅の庭に植えました。太陽光で温められた井戸水を与えるなど、手懸にかけて育てた甲斐あって、きれいなチューリップが咲きました。これが、常陸果樹のチューリップです。当時小千谷市小栗田にあった陸軍の飛行場に駐紮する軍人が隔にまたがって見に来たということです。

～ソメイヨシノ～

江戸末期に作られたソメイヨシノが新潟県で育たないものかと東京から苗木を運び、巴ヶ丘にある高橋家の別荘(現もみじ園)に植え、育成に成功しました。この話が伝わり、長岡市の悠久山に大量にソメイヨシノが移植されることとなりました。

～果樹園～

自宅前に果樹園をつくり、桜、柿、梅、桃などを栽培して、育つかどうかの試験を行いました。成果の見込まれるものについては、希望者に苗木を分け与え、普及を図った。ここには、ブラタナスの苗木も植えられ、大樹となって育っています。



巴ヶ丘のソメイヨシノ
(昭和16年)



チューリップの屋 神谷 果樹園のブラタナス



～高橋九郎の年表～

- 1860年(嘉永3年)12月17日 長岡市神谷町神谷村(現長岡市神谷)の庄屋高橋九郎右衛門の長男として誕生。場名栗太郎、その後石八郎。
 - 1862年(嘉永5年) 南島沼田郡神村大字後山(現在の南島沼田町江乙)で1千年以上の伝統を誇り、母・祖母の次女に嫁ぐ。庄屋高橋へ後継者に入る。
 - 1864年(元治元年) 高橋家に男子が誕生せず、生来に戻る。隣村片貝の「蔵屋一丸山殿」(現小千谷市片貝町浄土寺境内)に入門。石黒忠孝(後の軍医総監、日本赤十字社長、信濃新聞、正二位勲)と交際始める。
 - 1870年(明治3年) 蘭私塾「啓光塾」にて本村純寛(本名を誠一郎、旧長岡藩校崇徳館館長)に就いて漢字を修める(1873年まで)。
 - 1873年(明治6年)8月14日 公立の神谷村校(小学校)が吉川新田に開校。明治42年には基本金を設立し、利子をもって学校の運営に充当し、字区民からは教育費を徴収せず。
 - 1878年(明治11年) 第十六大区小千谷戸長に就任。
 - 1880年(明治13年) 父高橋九郎右衛門の死去により家督を継承。父名の太郎を継ぐ。
 - 1881年(明治14年)12月 吉川新田・遊幸両村の戸長に選出(公選)。
 - 1882年(明治15年) 時の鐘を自宅土蔵の上に設置し、毎日午前11時と夜12時に時を知らせた。神谷では、現在も午前11時になると犬の見物サイレンが時を知らせる。
 - 1884年(明治17年)8月 吉川新田等の10か村連合の戸長となる。
 - 1888年(明治21年) 村会議員に就任(晩年に至るまで)。
 - 1891年(明治24年) 村内政民に補助米を配給。
 - 1894年(明治27年)3月 帝國議会の衆議院議員、第六回帝國議会に出席。
 - 1896年(明治29年) 神谷信用組合を設立。
 - 1896年(明治29年) 巴ヶ丘別荘(現もみじ園)を建築。
 - 1898年(明治31年)8月 帝國議会の衆議院議員に再任。一三回、十四回、十五回、十六回の帝國議会に出席。
 - 1903年(明治36年) 高橋家を岡山より移入し、惣舎を築。豊後工場を作り普及に力を注ぐ。
 - 1904年(明治37年) チューリップ球根を入手し、譲り受けた水島義郎氏(遊幸村在住)が県内で初めて開花に成功。
 - 1906年(明治39年) 私設気象台を設置し、気象新聞による天気予報の告知開始。以後40年間、ラジオが普及までの40年間続けた。
 - 1906年(明治39年) 米廻り村農会長及び村農会正副会長に選出に就任。
 - 1907年(明治40年) 土地改良の目的で高橋排水を建設。
 - 1908年(明治41年) 吉川新田・遊幸地区の土地改良を推進。
 - 1908年(明治41年) 共同近代一歩を設置。
 - 1908年(明治41年)2月 米廻り村村長に就任(明治45年3月まで)。
 - 1904年(明治37年) 神谷信用組合を設立。初代組合長となる。
 - 1911年(明治44年)9月9日 ウェブ夫妻による神谷信用組合などの調査。巴ヶ丘別荘(現もみじ園)に1泊。
 - 1911年(明治44年) 小作米品評会開催。100年以上の小作米産者表彰。
 - 1914年(大正3年)8月 信濃川大洪水。神谷信用組合は水害救済のために式馬門の開出を行う。
 - 1916年(大正5年)10月25日 神谷銀行を設立(1934年4月第六大銀行と合併)。
 - 1916年(大正5年) 就任副院長を辞職。
 - 1922年(大正11年)9月21日 永眠。享年七十三歳。
- 其の他の功業
- ★銀行経営に開き：第六大銀行、与信銀行、開成銀行、新潟県農工銀行の経営に開き。
 - ★鉄道事業への関わり：北越鉄道(現JR信越本線)の現ルートを推進。両毛鉄道の第2位の株主。北越鉄道の計画に開き。
 - ★日本石油会社(現JX日鉱日石エネルギー)の設立：産産協会に参画。設立発起人に名を連ねる。
 - ★北島山産産株式会社の設立：取締役。北島沼田郡の各村下枝所宇赤川の大型開採を計画。
 - ★長岡病院(現長岡赤十字病院)の設立：病院設立に際し、石黒忠孝に相談。創設時の医師の大方を石黒氏が持参。
 - ★ソメイヨシノ株：巴ヶ丘に移植し、新潟県で育つことが確認できた後、悠久山に植えられた。
 - ★昔い伝え：神谷中央公園(旧果樹園)内のブラタナスの大樹は、九郎さんが移植したと伝えられている。高橋家と神谷小学校との境界の石垣にもかなりの数のブラタナスの大木が植わっていた。

6. マップの活用方法

作ったマップを今後どのように活用してもらうのがよいか、利用法について話し合った。出た意見は以下の通りである。

① もみじ園を見物に来たお客さんに配る。

もみじ園は紅葉の季節になると園内がきれいな赤に染まる観光スポットである。そのため、訪れるお客さんは年々増えている。しかし、もみじ園の紅葉がきれいだからということで訪れるだけで、高橋九郎については知らないという人がほとんどではないかと考える。

昔、もみじ園がこの地区の大地主であった高橋九郎の別荘であったということや高橋九郎がどのような人物で何をした人かということを知ること、もみじ園に対する興味が一層高まるのではないかと考える。また、もみじ園や高橋九郎に興味を持つことで、神谷や高橋九郎についてもっと知りたいという気持ちをおこさせることができると考える。

② 長岡の人達に見てもらうためにスーパーマーケットやコンビニエンスストアなどのお店においてもらう。

神谷の人でも高橋九郎について知らないという人が多かったことから、長岡全体ではもっと知られていないといと考える。そこで人が多く集まる市内のスーパーマーケットやコンビニエンスストアにおいてもらうことを考えた。マップを手にとって目を通すことで少しでも興味を持ってもらえば、市内ともなれば、行ってみようとする人も出てくるであろう。そうすれば神谷にも興味がわき、活性化に大きくつながると考える。

③ 神谷の人々に配る。

神谷に住んでいる人の中でも、高橋九郎は忘れ去られつつある。ましてや、小中学生や高校生をはじめとする若い世代の人達や最近神谷に越してきた人達は、知らないというのがほとんどではないかと考える。我々が作ったマップを見てもらうことで、この地がいまこうしてこのような形で続いているのは高橋九郎という人がいたからであり、その人が生まれ育ったこの地で、自分たちも暮らしているのだという誇りをもって生活してもらえと思う。また、マップを肴に昔の神谷について語り合うこともできるのではないかと考える。神谷の歴史や先人たちの偉業を知り、次の世代につないでゆくために、神谷地区の各戸にマップを配布し、一家で読んでもらうことは大切なことだと考える。高橋九郎について自分たちの子供の世代や若い世代に向けて発信していったほしい。そして永久的に高橋九郎について語り継いでほしいと私たちは願っている。

配布は回覧板につけて回してもらうのがひとつの方法である。次に神谷の公民館においてもらうことを考えた。神谷の公民館は、神谷の人達が出入りするの、その際に目を通してもらえるのではないかと考える。

7 まとめ

7. 1 神谷地区との交流について

神谷地区は地区行事が盛んで、4月から10月まではほぼひと月に1回の行事がある。このほかにも、65歳以上の人が加入している「福寿会」や若い男性が入っている「兄会」、趣味を同じくする人たちが集まった同好会などの団体が、定期的に独自に行事定を行っている。

図表 7-1 神谷地区の主な行事

月	行 事
4	花見大会
5	どろんこ田田植
6	神谷区民大動会
8	盆踊り大会、秋季大祭
9	どろんこ田稲刈り
10	収穫祭
1	さいの神

今年は、5月に行われた「どろんこ田田植え」に参加させてもらった。当日は神谷の小学生や親御さん、お年寄りの方など多くの人に参加されていて、神谷地区の団結力の強さを見た気がした。4名の学生が参加させてもらい、昔ながらの田植えを経験することができた。田んぼに入って直接手で植えるため、服が汚れないはずはなく、作業を終えるころには飛び散った泥が至る所に付着していた。来年度、参加する際には着替えの服を用意していたほうがよいと思った。

田植え後に行われた慰労会にも参加させてもらい、神谷の皆さんと交流することができた。4年生は、昨年行った「E ボートでの須川下り」の活動を通して神谷の人達とは顔なじみになっていたため、「おう来たねー」と気軽に声をかけてもらっていた。

どろんこ田田植に参加して感じたことは、

- ①団結力の強さ。
- ②人の良さ。
- ③地元愛の強さ

である。

地域活性化プログラムの活動では、地域の行事に数多く参加し、地域の人達との交流を深めることは非常に大切なことである。しかし、今年は「どろんこ田田植え」だけでおわってしまった。来年度は、もっと多くの行事に参加するようにしたい。

7. 2 高橋九郎マップ作成について

高橋九郎マップ作りを通して学んだこと、活動の成果は、以下の通りである。

① 活動から学んだこと

今回は神谷地区の魅力を発信するために、神谷地区を代表する偉人である高橋九郎の業績と関連史跡を記録して後世に伝え、さらには、高橋九郎の足跡をたどる手助けとしても使え

る「高橋九郎マップ」の作成を行った。

高橋九郎マップの製作を通して、神谷地区の魅力は今まで学んできた以上に深いということがわかった。これまで神谷地区が新潟県内で初めてチューリップを开花させた地であることを広めるためのチューリップ植栽やアンケート調査、E ボートを使用した須川下りの活動などを行って神谷地区の魅力を発信してきたが、今回、神谷の偉人である高橋九郎に的を絞った活動を行ったことで神谷地区の新たな魅力を発見することができ、より深く神谷の魅力に触れることができた。

さらに、一つのことをみんなで協力して成し遂げることの大変さを学んだ。自分たちの企画力の弱さ、情報の共有の難しさを身をもって痛感した。この活動によって新しく自分たちの弱さを見つけることができた。

② 活動の成果

今回の「高橋九郎マップ製作」の成果として、次の点を挙げることができる。

- i. 高橋九郎を通して神谷地区の魅力を再発見することができた。
- ii. こんなにも素晴らしい功績を遺した偉人が居るということを発見したことで、神谷地区のPRにとどまらず長岡市のPRにつながる。
- iii. 地域の方々にも高橋九郎の功績や魅力を改めて知ってもらうことができた。

今回の活動を通して、自分たちが高橋九郎を調べて功績を知り、今までとは違った神谷地区の魅力を再発見することができただけでなく、地域の方々に高橋九郎について今まで以上に知ってもらうきっかけを作ることができたと考える。また、他地域の方々に高橋九郎の功績を伝えることでその偉大さが認知され、長岡市をあげてPRすることに繋がる可能性もあるのではないかと考える。

7. 3 マップ作成を通しての提案

神谷地区や高橋九郎の魅力は、今回だけでは調べきれずまだまだ沢山あるということに気付いた。今回行った活動を通して、以下のことを提案する。

- ① もみじ園は脚光を浴びているが、それを作った高橋九郎のことは知られていないということが分かった。もみじ園に高橋九郎マップを配布することはもちろんのこと、高橋九郎の功績をまとめた看板やブースを設置し、高橋九郎がもみじ園の基礎を作ったということをアピールし、観光の新たな目玉とするような取り組みを行う。
- ② 今回の高橋九郎マップで載せきれなかった情報をまとめ、神谷地区の歴史書として編集する。さらに、地区に残されている書物や写真の整理を行い、神友館の一面に展示コーナーを設けて展示する。

7. 4 活動の反省点と改善点について

高橋九郎マップを完成させたことで、「高橋九郎マップを作る」という今年度の活動目標を達成することができた。しかし活動する中でいろいろな課題が見つかった。

活動の中で見つかった課題とその対策を考える。

- ① 情報共有を重視しなかった。

初期より情報共有場所を作成しなかったこと、その手段を確立させなかったことにより情

報共有を図ることができなかった。そのことが原因で、個々の意識やモチベーションの違いですれ違いが起こり、活動をなかなかうまく前に進めることができなかった。直接自分の耳で聞いた内容と誰かの口から伝えられた内容では、話し手により情報が取捨選択されてしまうため、情報の統一がとれていないこともあった。なによりも、どこに向かって作業をしているのか、何が目標なのか、何のために今この作業を行っているのか、という部分でよく迷走が起きてしまった。そのため、ゼミナール活動内での意思統一のための報告などに時間が取られてしまい、作業が計画通りに進まなくなってしまった。

この課題を解決するには、まず初めに情報共有の手段を確立し、次に、その手段を使って情報共有を図りながら活動を行うことである。こうすることでゼミ内でのコミュニケーションが図れ、メンバー全員の意識を同じ方向に向けることができ、自分が今何をすればいいのかをきっちり把握させ、すれ違いをなくし、円滑なゼミナール活動にすることができると考える。

② 神谷の人達と交流がほとんどできなかった。

高橋九郎マップを作るために必要な情報を集める方法として、図書館やインターネットからの情報収集を重視した。そのため、神谷での活動よりも図書館やインターネットでの活動に時間を取られてしまい、結果として、神谷の人達との交流がほとんどできなくなってしまった。

地元に着した生き方をした高橋九郎を題材としたマップを作るのであるから、神谷の人達との交流を通して、図書館やインターネット情報からは得ることのできない地元ならではの高橋九郎情報を重視すべきであったと考える。

改善策は、神谷の人達と協力し合うためにコミュニケーションが深めることである。こちらからイベントを企画する等、コミュニケーションを深めるための活動を積極的に働きかけて行く必要がある。

③ 満足できる報告ができなかった。

報告会では話が聞きにくい、質疑に十分対応できなかった、などの課題があった。聞き手が聞きやすいようにゆっくりと話したのだが、かえってこの話し方が聞きづらいという意見もあった。適度なスピードで話すことも大切であるが、原稿を棒読みする報告であったことが、聞きづらいという意見が出た原因であると考ええる。発表の場では、原稿を見ずに話せるように十分時間を取って練習しておくべきであったと反省している。

この点は、もっと早めに高橋九郎マップや発表原稿を完成させておけば発表練習に使える時間がとれ、納得のゆく発表ができたと考える。早め早めに行動を起こすことで解決できると考える。

質疑応答については、突然の専門分野のことであったので、全員がそれを把握しておらず、ステージの上で困惑してしまった。これは、プレゼンテーション能力やまとめる力の弱さも影響していたと思うが、何故この活動を行ったのか、何を知るためにこの活動を行ったのか、という点をメンバー個々人が理解していなかったためであると考ええる。

一人ひとりが自分の活動内容に責任を持ち、指示を待っているのではなく自分から行動し、活動内容と意義を十分に理解するようにして行かなければならない。

この3つに共通しているのは、コミュニケーションが不足していたという結論になった。ゼミ

内でのコミュニケーションがとれなければ、神谷への発信やその他の人たちへ伝えることなんてできないと知った。ゼミナール生一同の親睦を深め、円滑に議論ができる関係をつくることによって、高橋九郎マップ作成という協働作業を円滑に進めることができるのである。また報告会や報告書に関しても、報告の方法や報告書の書き方、視点の置き方について、各自がしっかりと意識して取り組むことが重要であることが分かった。

ゼミナール内の意思統一に関しては、各自がメモを取り、核心となる部分を把握し、食い違いのない議論を行うことが重要だと考える。その際、自分の意見と他人の意見を分けて考え、自分の言葉で自分の意見を発信することが重要である。さらに、何よりもまず初めに、情報共有のための手段をきちんと確立しておくことである。

ここまでのことができていれば、発表会までの資料作成や活動を起こすまでの時間を短縮できたのではないかと考える。発表会までに意見を出し合い、より良い発表ができていたろうし、個々の意識も高めていくことができたと考える。

以上の反省を生かし、来年度の研究を深めて行きたい。

《参考文献》

- 『越路町史 資料編 3 近代・現代』 越路町 平成 11 年 3 月 31 日発行
『越路町史 通史編 下巻』 越路町 平成 13 年 11 月 30 日発行
『創業百年史』 株式会社 北越銀行 昭和 55 年 9 月 10 日発行
『決定版 長岡ふるさと大百科』 郷土出版 2005 年 10 月 1 日発行
『越路町制 50 周年記念誌』 29 項より 2005 年 3 月 20 日発行
『越路町史 近世・近代編』 越路町 平成 11 年 3 月 31 日発行
『高橋九郎、郷土長岡を創った人々』 長岡市 2009 年 3 月発行
越路町 100 年の歩み
(<http://www.e-net.city.nagaoka.niigata.jp/elibrary/ayumi/other/koshiji.html>)

謝

辞

「高橋九郎マップ」作りの活動を進めるにあたり、多くの方々にお世話になりました。

特に、活動の各所において適切なアドバイスをいただいたアドバイザーの神谷区長白井湛様、ながおか生活情報交流ねっと理事長桑原眞二様には、中間発表の際、もみじ園と高橋九郎の関係が分かるように書いてほしいということや、もっと高橋九郎の活躍を掘り下げて書いてほしいという、とても的確なアドバイスをしてもらいました。このマップが完成することができたのもお二人からの貴重なアドバイスのおかげであると考えております。

また本学の松本和明教授には、企業人として活躍した高橋九郎に関わる資料のご提供と的確なるアドバイス、および作成した高橋九郎マップの監修をしていただきました。先生のご支援のお蔭で高橋九郎の実像を映し出した高橋九郎マップを作ることができました。この場をかりて、お礼申し上げます。

また、高橋九郎マップ作成に際し、編集や校正等でご協力いただいた長岡大学地域連携研究センターの恩田麻未さん、山田満智子さんにお礼申し上げます。

さらに、去年の「E ボートでの須川下り」や5月の「どろんこ田植え」では、神谷の皆様大変お世話になりました。みなさまとの交流を通して、地域が持つ暖かさ、神谷の活力の源を体験することができました。この貴重な経験を今後の学生生活等に生かして行く覚悟でおります。皆様のご厚意にお礼を申し上げるとともに、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻をお願いいたします。

最後に、1年間を通して厳しくも優しい指導を賜りました高橋治道教授に感謝します。

たくさんの方に出会い、ご迷惑をおかけしながらも無事にこの1年間活動が続けてくることができました。今回関わってくださった方々に、この活動を通じて成長した私たちの姿をお見せするとき、それが一番の恩返しになると考えております。

ご協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げ、謝辞にかえさせていただきます。

平成27年度 学生による地域活性化プログラム
高橋治道ゼミナール活動報告書

【発行日】 平成28年 3 月31日

【発行人】 村山 光博

【発 行】 長岡大学 地域活性化プログラム推進室

〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8

T E L 0258-39-1600 (代)

F A X 0258-39-9566

<http://www.nagaokauniv.ac.jp/>